

K-606

山形県尾花沢市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

毒沢遺跡

発掘調査報告書

1981

尾花沢市教育委員会

「毒沢遺跡」正誤表

頁	行	誤	正
1	3	発録	登録
1	6	1 4 0 1 — 1	1 4 1 0 — 1
14	5	不明の遺構	ひようたん形の遺構
17	13	平坦	平坦
17	14	"	"
17	17	"	"
18	6	"	"
18	11	"	"
18	18	"	"
18	24	"	"
18	30	"	"
19	2	"	"
19	5	"	"
19	9	"	"
25	2	25点	26点
25	20	撚条文	撚糸文
25	22	"	"
28	7	平坦	平坦
28	18	摩滅	磨滅
28	18	部部	部分
33	3	摩滅	磨滅
33	29	東海地方の桜ノ湖Ⅰ式	東海地方の創草期にみられる桜ノ湖Ⅰ式

山形県尾花沢市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

毒沢遺跡

発掘調査報告書

1981

尾花沢市教育委員会

序

尾花沢市は、新潟県の高田、岐阜県の高山とともに日本三多雪地の一つに数えられ、本県の母なる川最上川に注ぐ丹生川、曖氣川、野尻川の流域に開けた集落であります。

この多雪の地に人々がいつ頃から住みついたかは詳らかではありませんが、当地には多数の遺跡があり「山形県遺跡地図」には 100カ所ほどの遺跡が登録されています。今後、もっと確認されるのではないかと思われます。

市内の遺跡については、今まで数多くの人々によって発掘調査が行なわれましたが、まだ、埋蔵文化財に対する地域の人々の関心が低く、土地改良等で破壊され、失われてしまった遺跡も大部見受けられます。埋蔵文化財は一度破壊してしまえば、二度と元に戻らない大切なものです、また、土中に埋もれた遺跡は、発掘調査によって生き返ってまいります。永い歴史に埋もれた先人の文化を知り、これから文化の創造に役立てるることはもちろん、これを大切に保存し後世に伝えることは、私達に課せられた大きな責務であると思います。

本報告書は、今回、毒沢地区の団体圃場整備事業が、毒沢遺跡にかかることとなり、尾花沢市教育委員会が山形県教育庁文化課の指導のもとに、昭和55年に遺跡を発掘調査し、その結果をまとめたものであります。この報告書が地域住民の埋蔵文化財理解の一助になりますれば幸とするものであります。

終りに、本調査にあたり山形県教育庁文化課をはじめ、早春からしかも梅雨期にかけての発掘調査に、いろいろ御協力下さいました各関係者の皆様に心から深く感謝申し上げます。

昭和56年 3月

尾花沢市教育委員会

教育長 奥山 誉男

例　　言

1. 本報告書は団体営圃場整備事業に係わる毒沢遺跡緊急発掘調査の報告書である。発掘調査は、遺跡内に密生する杉林の伐採・運搬のために、昭和55年5月12日から同年5月21日までと、昭和55年6月16日から同年7月17日までの2期間に調整して実施した。

2. 調査体制は次の通りである。

調査主体 尾花沢市教育委員会

調査担当 毒沢遺跡発掘調査委員会

調査主任 大類 誠（尾花沢市教育委員会 社会教育課）

調査指導 山形県教育庁文化課

調査協力 尾花沢市農林課 尾花沢市文化財保護委員会

事務局 尾花沢市教育委員会 社会教育課

3. 掃図縮尺は、遺構については40分の1とし、第8図遺構・遺物の分布図は120分の1とした。遺物については土器拓影図及び石器実測図は2分の1とし、但し第6図石器実測図は3分の1とした。掃図の記号は、S P=ピット・S K=土壌・S X=性格不明の遺構・R P=土器・R T=石器・R F=剝片及び碎片とした。

4. 本報告書の執筆・掃図及び図版の作成は大類誠が行ない、菅野与一が補佐した。本書の編集は奥山龍璋・菅野与一・大類誠が担当した。

5. 発掘調査及び本報告書作成にあたって、次の方々から御便宜・御教示を賜わった。ここに記して感謝申し上げます。

星川茂平治・佐藤正俊・名和達朗・保角里志・大場明・鈴木美登・阿部豊・国分芳房
荻野タカネ・荻野善次郎・阿部明彦（順不同・敬称略）

目 次

I	調査の経緯	
1	調査に至る経過	1
2	調査の方法	3
3	調査の経過	3
II	遺跡の立地と環境	
1	毒沢遺跡の立地	6
2	周辺の遺跡	6
III	調査の概要	
1	遺跡の層序	12
2	遺構の分布	14
3	遺物の出土状況	14
IV	遺構と遺物	
1	遺構	17
	土 壤	17
	ピット	18
	長方形の堅穴遺構	19
2	出土遺物	25
	土 器	25
	石 器	28
V	総 括	
1	遺構について	32
2	遺物について	33

挿 図 目 次

第1図	毒沢遺跡と周辺の遺跡	
第2図	遺跡の地形図	1
第3図	グリット配図	2
第4図	土器拓影図1（周辺の遺跡）	8
第5図	土器拓影図2（周辺の遺跡）	9
第6図	石器実測図1（周辺の遺跡）	10
第7図	石器実測図2（周辺の遺跡）	11
第8図	土層断面図	13
第9図	遺構・遺物の分布図	15
第10図	土 壤（1）	20
第11図	土 壤（2）	21
第12図	土 壤（3）・ピット	22
第13図	長方形の堅穴遺構	23
第14図	土器拓影図（1）	26
第15図	土器拓影図（2）	27
第16図	石器実測図（1）	30
第17図	石器実測図（2）	31

図 版

- 図版1 毒沢遺跡遠景・毒沢遺跡近景
- 図版2 B地区完掘状況・B地区調査風景
- 図版3 S X 17完掘状況・S X 17柱穴の配列状況
- 図版4 S K 1～5完掘状況・S K 4完掘状況
- 図版5 毒沢遺跡出土土器1
- 図版6 毒沢遺跡出土土器2
- 図版7 毒沢遺跡出土土器3・毒沢遺跡出土石器1
- 図版8 毒沢遺跡出土石器2



第1図 毒沢遺跡と周辺の遺跡 ($S = 1 : 25000$) 1.毒沢遺跡 2.下原遺跡
3.一本松遺跡 4.鳥捕場遺跡 5.上の台遺跡

I 調査の経緯

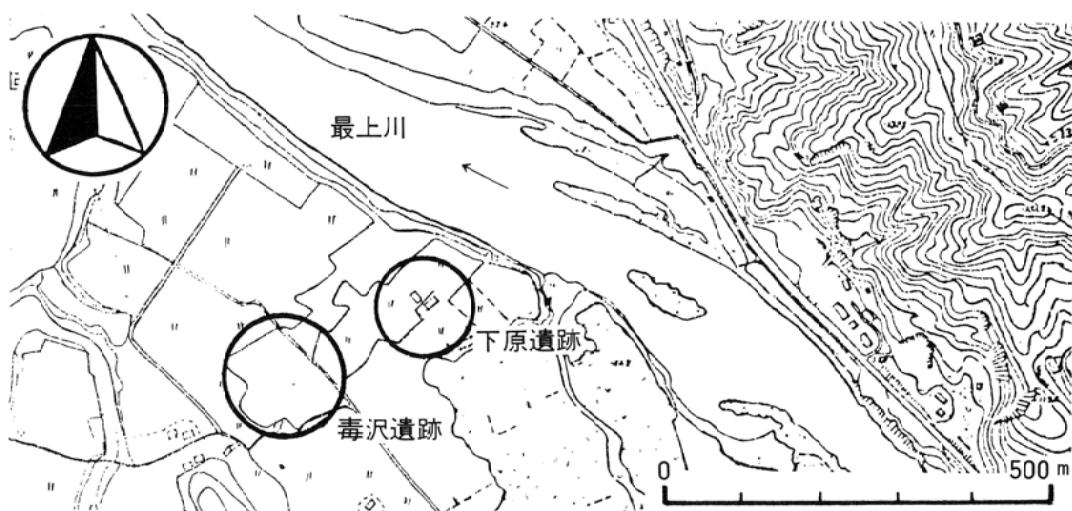
1 調査に至る経過

尾花沢市には数多くの遺跡が存在し、「山形県遺跡地図」（昭和53年・山形県教育委員会）によれば、100ヶ所程の遺跡が発録されている。これは現在までに確認された遺跡で、まだまだ確認されていない遺跡が多くある。登録された遺跡の時代は、先史時代から歴史時代にまで及び、その中で縄文時代の遺跡が最も多くみられる。

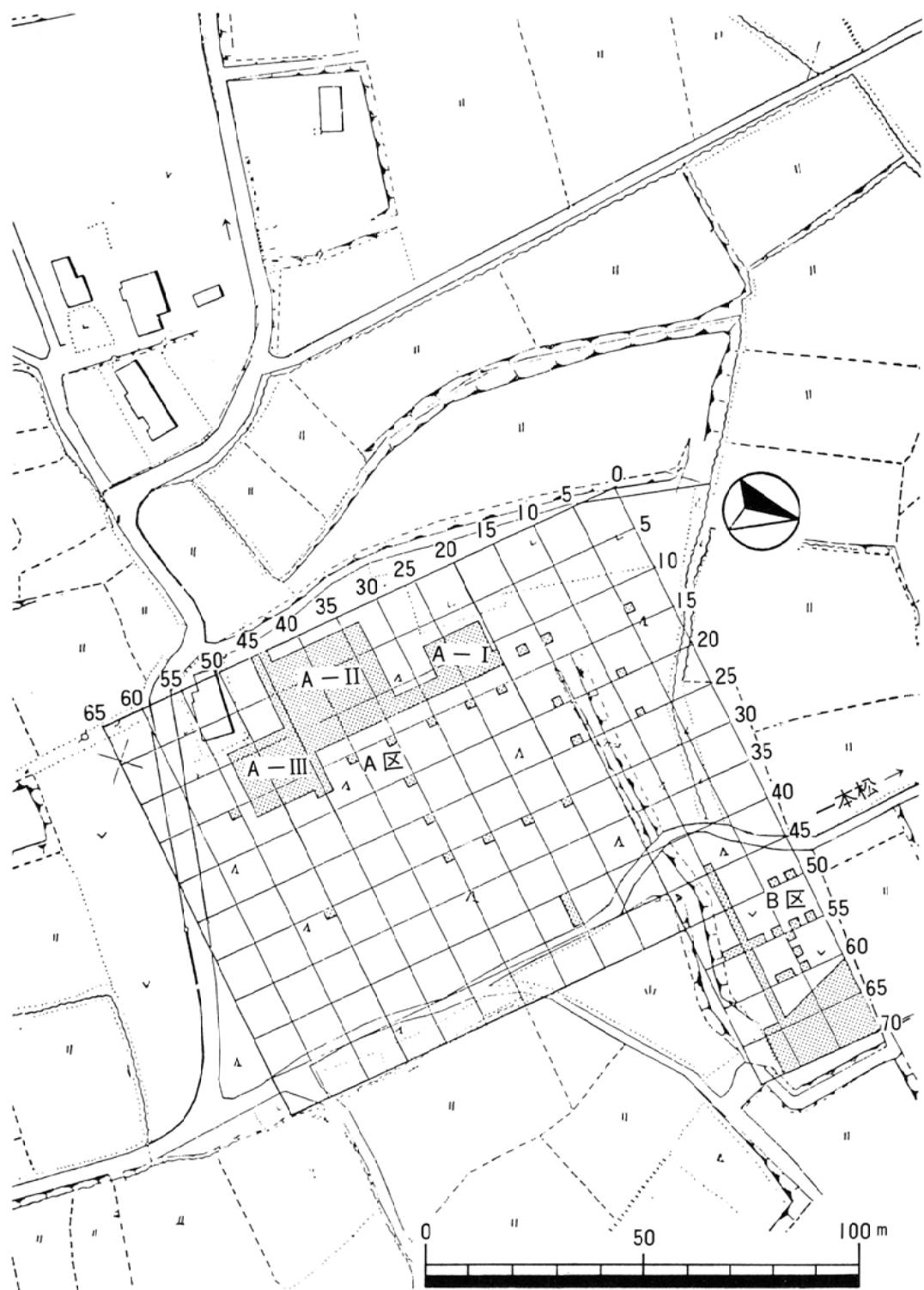
毒沢遺跡は、尾花沢市大字毒沢字植松1401-1他に所在し、現在遺跡は樹令30年ほどの杉林で大半が覆われ、一部が畠地に利用されている。

毒沢地区では、毒沢遺跡の1ヶ所が知られているのにすぎなかったが、その後の分布調査で、新たに4ヶ所で遺跡が発見された。

昭和53年度から3ヶ年計画で進められた毒沢地区の団体営圃場整備業は、昭和55年度には、当遺跡にも及び破壊されることになった。このため事前に、昭和54年10月に山形県教育庁文化課が主体となり、試掘調査が実施された。その結果、遺跡から縄文時代の土器や石器が得られた。尾花沢市教育委員会は、これらの成果を基にして、尾花沢市農林課等の諸関係機関と協議・調整を行ない、山形県教育庁文化課の指導のもとに、昭和55年5月12日から同年5月21日までと、昭和55年6月16日から同年7月17日までの2期間にわたって記録保存による緊急発掘を実施したものである。



第2図 遺跡の地形図



第3図 グリット配図

2 調査の方法

遺跡の範囲は南北に約130m、東西に約140mに及び大部が杉林で覆われ、一部が畠地に使用されている。遺跡の現状から、一本松遺跡に向かって続く農道を挟んで、左側の杉林をA地区、右側の畠地をB地区とした。A地区に密生する杉林の伐採・運搬が遅れたために、まず、B地区の畠地から調査を開始する。A地区は業者の伐採・運搬の進み具合に応じて、調査にはいることとなる。

グリット設定にあたって、遺跡全体の地形を考慮したうえ、B地区から $10 \times 10\text{m}$ の大グリットを設定する。後にA地区全体にも $10 \times 10\text{m}$ の大グリットで覆った。東西方向にX軸南北方向にY軸とした。更に $10 \times 10\text{m}$ の大グリットを $2 \times 2\text{m}$ の小グリットに分割し、調査及び、遺構・遺物の記録はこの小グリット単位で行なう。グリットの名称は小グリット単位で行ない、西北隅で交るX軸とY軸の数字番号をもって表わした。

A地区の場合、精査区として3ヶ所に分けたが、それぞれについて便宜的にAⅠ～AⅢ区とする。遺構の平面図は20分の1、土層断面図は10分の1で記録する（第3図）。

3 調査の経過



▲遺跡遠景



▲調査風景

調査は、不順な天候に見舞われ、また遺跡の大半が杉林で覆われているため困難を極めた。調査が停滞することがたびたびであったが、無事現地での調査が終了した。

以下、調査経過を略述していく。

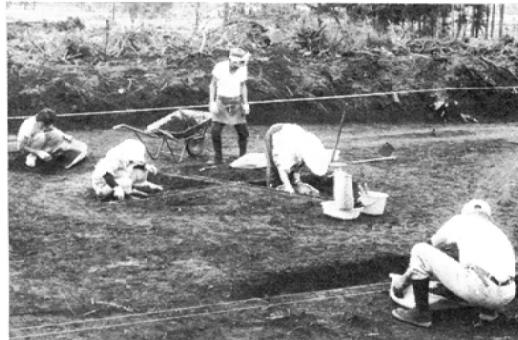
5月9日（曇） 器材運搬。

5月12日（快晴） 地鎮祭。調査日程の説明
B地区にグリット設定。

5月13日（小雨） グリット及びトレンチ設定。粗掘り開始。

5月14日（快晴） 粗掘り及び面精査。3-54G東壁セクション図作成。

5月15日（雨） 面精査。遺構・遺物検出できず。雨の中周辺遺跡の分布調査。



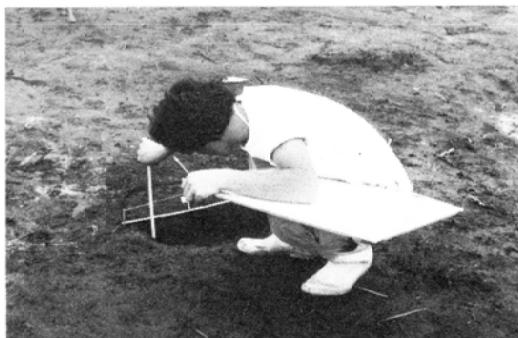
▲ A—III区調査風景



▲長方形の竪穴遺構発掘風景



▲図面作成風景



▲S P I O土層断面作成風景

5月16日（曇） 面精査。9—55G掘り下げる。石鎌が出土する。

5月19日（晴） 面精査の結果、風倒木や、現代の落ち込み確認。54—3G掘り下げる。

5月20日（曇） A地区外郭にグリット設定する。午後からB地区の平板測量。

5月21日（曇） B地区の平板測量。54—1G・3—54G東壁土層断面図作成。本日で調査を一旦打ち切る。

6月16日（晴） 調査再開。伐採・運搬が終了したところから、木端の整理作業。

6月18日（雨） A地区的木端整理作業。市内小学校校長の方々来訪。

6月19日（晴） A地区的木端整理作業。

6月20日（晴） A地区的木端整理作業。

6月21日（曇） 木端整理作業終了。グリット設定。

6月23日（晴） 雜木林伐採終了。南北4×52m・東西4×36mのトレーニチ設定。

6月24日（晴） 重機（ユンボ）で、トレーニチ内の抜根及び表土を剥ぐ。単発的に遺物が出土。

6月25日（晴） トレーニチの粗掘り。残った杉林内の坪掘り。

6月26日（雨） トレーニチの粗掘り及び面精査。拡張区12—15—20—27G・6—15—33—43G・14—21—46—53Gを各々設定する。午後から豪雨に見舞われ室内作業となる。

6月27日（雨） 重機で拡張区内の抜根及び表土を剥ぐ。トレーニチの面精査。杉林内の坪掘り。

6月28日（曇） 重機で拡張区内の抜根及び

表土を剥ぐ。土器2片出土。

6月30日（晴） A—I・II区の粗掘り及び面精査。土器・石器が出土。

7月1日（晴） A—I・II区の面精査。A—I区には遺構・遺物全く認められず。

7月2日（曇） A—II区面精査。SK1～6のプラン確認。土壤の構築面第IV層下部から第V層上部にかけてと考えられる。

7月4日（曇） A—III区面精査。SK—4掘り下げ。土層断面図写真撮影。

7月5日（曇） A—III区面精査。15—41～43G土層断面図作成。SK1～6掘り下げ。

7月8日（曇） SK1～3土層断面図作成。SK1～5写真撮影。A—III区面精査。

7月9日（曇） SP7～13プラン確認及び掘り下げ。SX17プラン確認。

7月10日（晴） A—II区面精査。SK14・15・19検出。掘り下げ。SX16掘り下げ。

7月11日（雨） A—II区遺構平面図作成。遺物の記録。SX17掘り下げ。

7月12日（雨） A—II区遺構平面図作成。

7月14日（小雨） A—II区遺構平面図作成。SX17掘り下げ及び写真撮影。SX16平面図作成。遺物を取り上げる。

7月15日（雨） SX17の土層断面図を作成する。

7月16日（雨） SX17の土層断面図を作成し、午後1時30分より現地説明会を行なう。

7月17日（曇） SX17の完掘。A—II・III区写真撮影。5～10—46Gの土層断面図作成。機材撤収。本日をもって調査終了。



▲ピットの配列状況



▲SP12土層断面



▲SK6とSP7・8



▲SK6

II 遺跡の立地と環境

1 毒沢遺跡の立地

山形県南部に最奥の源泉をもつ最上川は、県内を北流し、やがて尾花沢市と大石田町付近で流路を西に向けるが、この流路をかえるあたりは、最上川の蛇行が最も激しいところで、まさに蛇のうねりに似つかわしい流れを呈している。河川に沿い段丘の発達が著しく、安定した段丘には集落が発達している（第1図）。

毒沢遺跡はその一角に占居している。最上川によって形成された左岸段丘上に立地し、標高は約60mを測る。毒沢部落の中心地から北西方向に1kmほどいったところにあたる。遺跡の全体的な地形は、北東方向に緩やかに傾斜している。A地区の精査区域が微高地になっており、一本松遺跡へ向かって行く農道に沿って左側が最も低くなっている。B地区では、トレンチに沿ったかたちで微高地が発達し、北西方向に緩やかな勾配がみられる。

調査の結果、A地区の畠地と、土壘のごとく築かれた水路の北側のはば全体にわたって、土盛り及び地均しがされていることが明らかになった（第3図）。

2 周辺の遺跡

調査が始まってから4日目の5月15日、生憎雨ではあったが1時間ほどの機会を設け、毒沢遺跡周辺の遺跡の分布調査を実施した。毒沢遺跡の理解や位置づけを深める意味で、新たに発見された下原遺跡・一本松遺跡・鳥捕場遺跡・上の台遺跡の概要に触れる。

下原遺跡（第1図2）

毒沢遺跡の北東方向約200mほどいった所にある。標高は約55mを測る。時代は縄文時代晚期と考えられる。国分芳房さんの話によれば、多数の石鏸や壺形の土器が採集できた時期があったそうである。現在、遺跡は宅地及び水田になっており、壊滅に近い状況にあると思われる。

一本松遺跡（第1図3）

毒沢遺跡の北西方向約300mほどいった所にあり、段丘の突端周辺に立地している。標高は約60mを測る。本遺跡の命名については、本来この周辺は袋と呼ばれているが、特に遺跡の立地するあたりは通称一本松と呼ぶことが多いことから、この名称をもって遺跡名とした。

採集された遺物は土器（第4図1～3）と磨製石斧（第7図10）がある。第4図1は胎

土に植物纖維を含み、文様は組紐の一種かと思われる。拓影では上端に沈線がみられる。繩文時代前期のものであろう。第4図3は、鉢型土器の口縁部破片で羊歯状文がみられる。以上の特徴から繩文時代晚期大洞BC式に比定されよう。石器では磨製石斧の他に剥片も採集している。

現在、ほとんどが水田、畠地になっているが、一部荒地、杉林で覆われている。

^{とつとりは}
鳥捕場遺跡（第1図4）

毒沢遺跡の西方向約200mの所に位置する。標高は約70mを測る。一段高い舌状に発達した段丘に立地し、見晴しのきくところである。繩文時代の遺物を採集している（第4図4）。現在、遺跡のほとんどが水田になり、一部雑木林となって残っているにすぎない。

^{うえ}
^{だい}
上の台遺跡（第1図5）

毒沢遺跡の南東方向約1kmの所に位置し、毒沢村落の南端にあたる。標高は約55mを測る。毒沢村落の大部分は自然堤防上に発達し、当遺跡もこの上に立地している。遺跡の規模は南北に約150m、東西約80mの範囲で認められていたが、近年の開発で遺跡のほぼ南半分は壊滅し、宅地と畠地の部分が、辛うじて破壊を免れている。

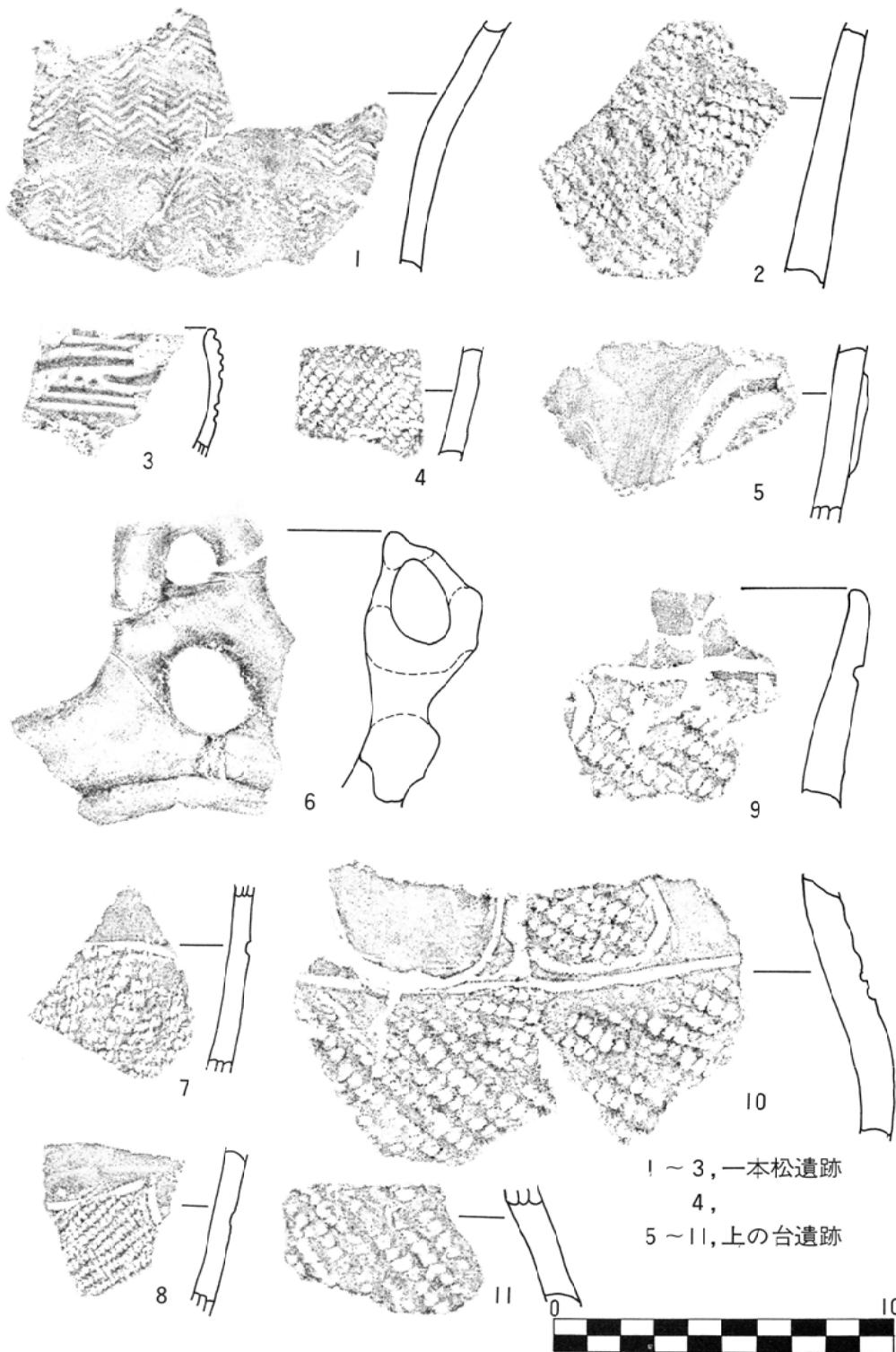
採集した遺物は、繩文時代のものと平安時代のものとがみられる（第4図～第7図）。繩文時代の資料が多数を占め、平安時代のものが僅かにみられる。

繩文時代の土器は後期前葉のものと考えられる。第4図9～11は同一個体である。この土器に認められる施文方法は、沈線で区画した後に繩文が施文されている。このような手法は、第4図7・8、第5図14の破片にも認められる。

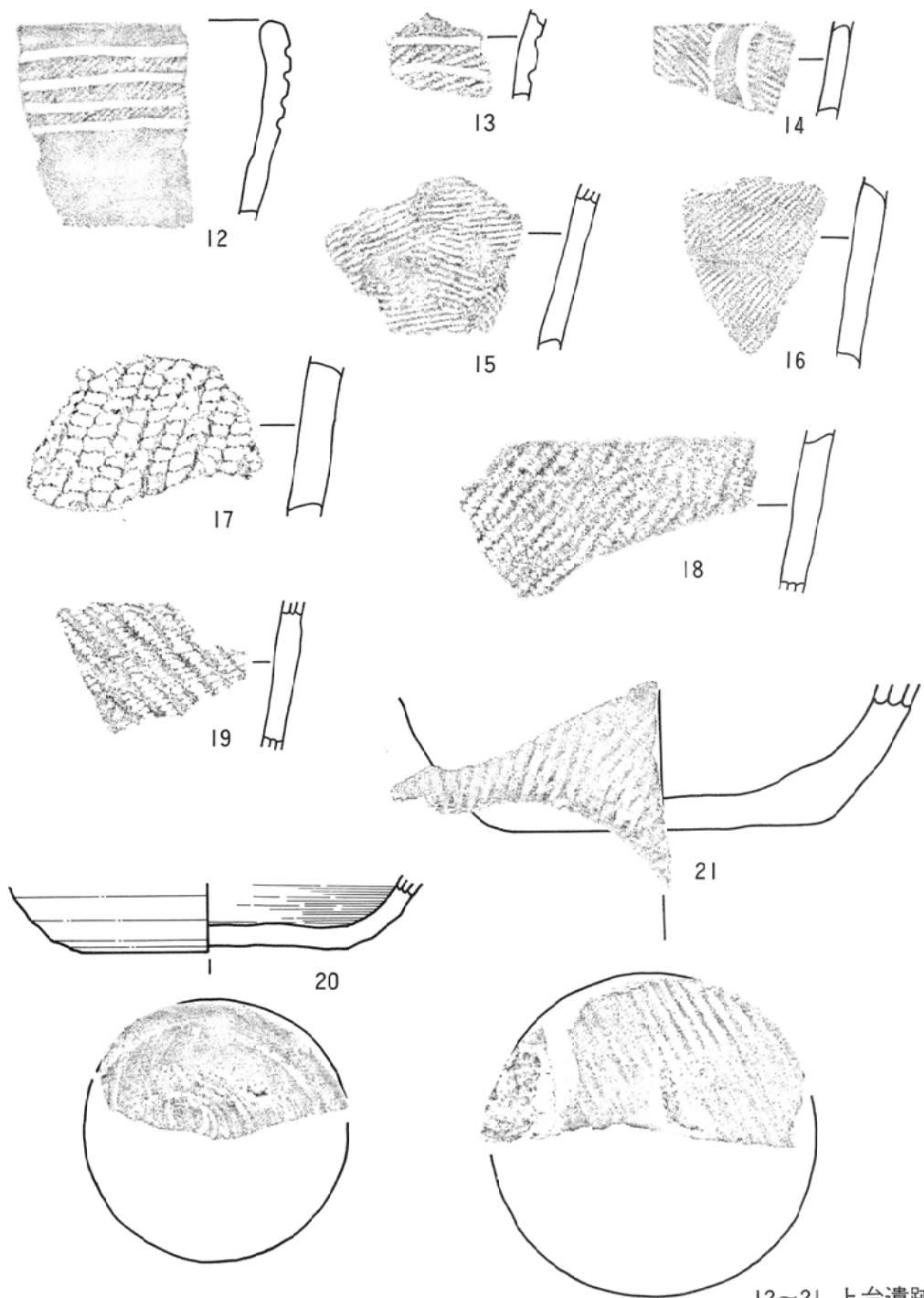
石器類では、打製石器である箆状石器（第6図1・2）、スクレイパー（第6図3・4）二次加工のある石器（第6図5～7）や、磨製石斧（第7図8）、凹石（第7図9・12）、敲石（第7図11・12）、石皿（第7図13）等が採集できた。

平安時代のものでは、土師器と須恵器を採集している。土師器は甕形土器の口縁部破片と考えられるもので、須恵器は壺（第7図20）と壺（第7図21）と考えられるものである。

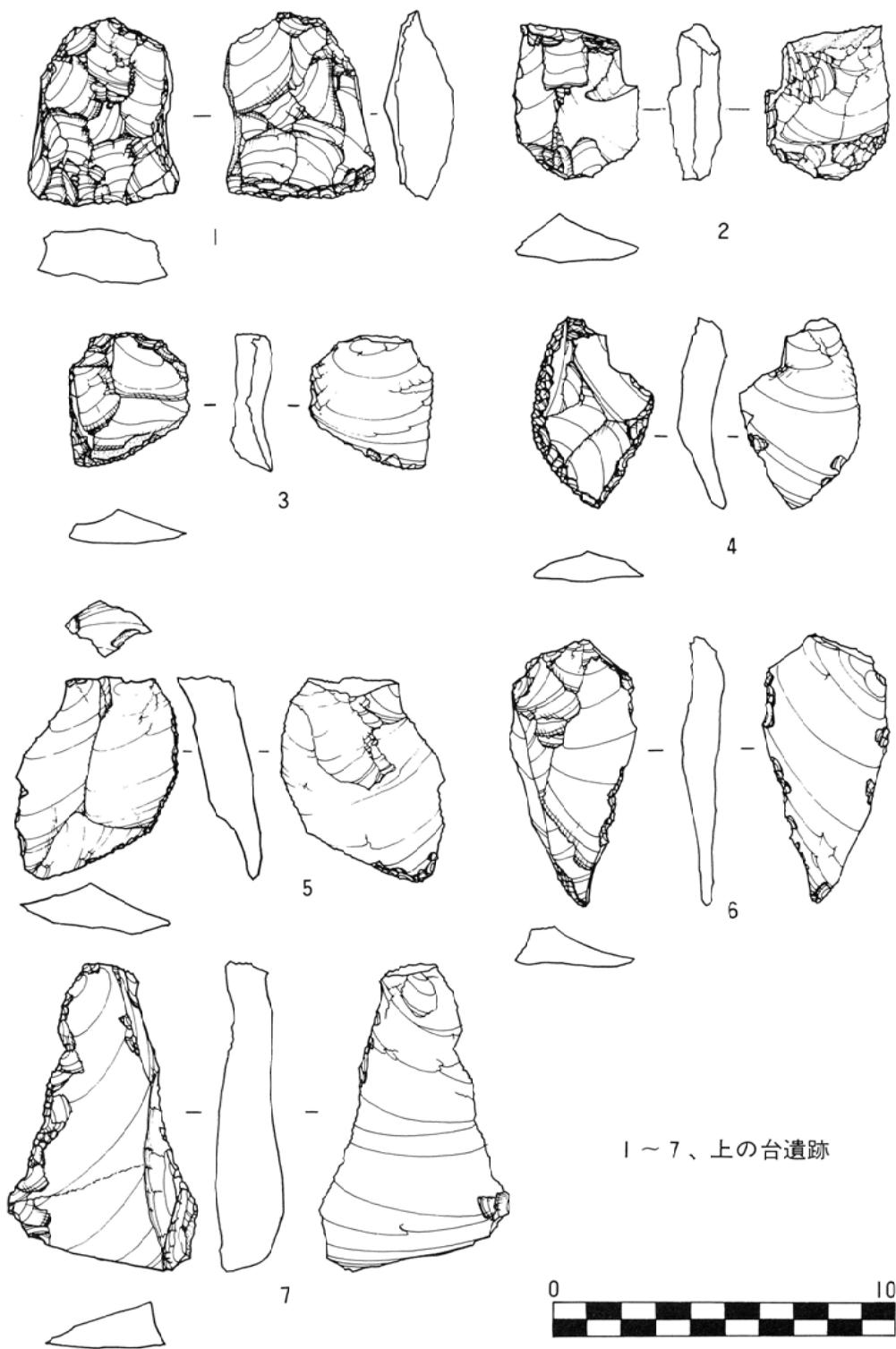
壺は底部に、回転糸切りの痕跡が明確にみられる。壺は表面に叩き目がみられ、淡緑色の袖でうっすらとつつまれている。



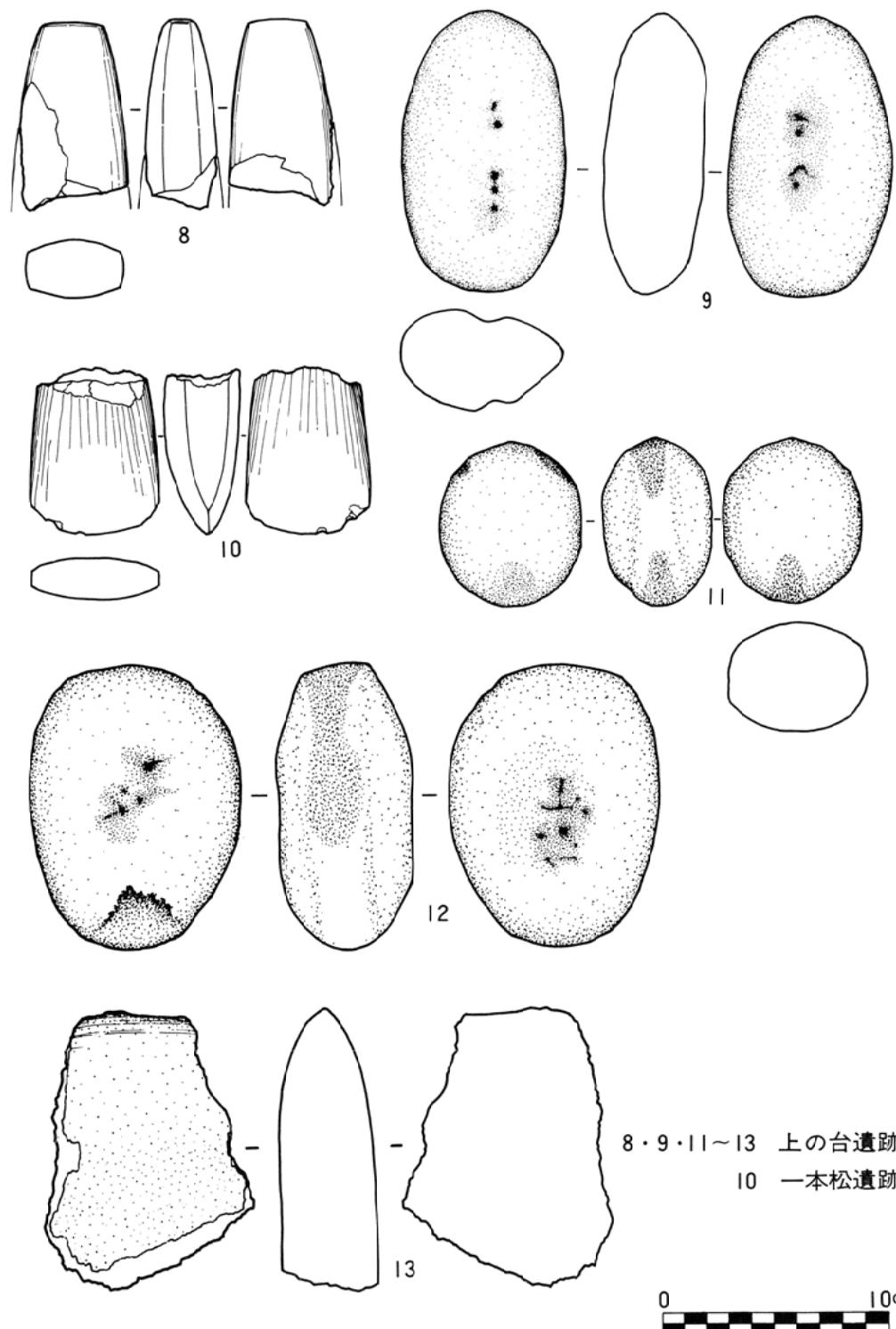
第4図 土器拓影図Ⅰ（周辺の遺跡）



第5図 土器拓影図2 (周辺の遺跡)



第6図 石器実測図I (周辺の遺跡)



第7図 石器実測図2 (周辺の遺跡)

III 調査の概要

1 遺跡の層序

毒沢遺跡は、最上川によって形成された河岸段丘上左岸に立地している。A地区は南北に微高地の発達があり北東方向に緩やかに傾斜し、B地区は東西に微高地が発達し、北西方向に緩やかに傾斜する。両地区の間に僅かに低地がみられる。遺跡の北側には、東西に走る谷があるなど、最上川にもたらされた地形が充分に考えられる。

遺跡の基本的な層序は、A地区15-41~43西壁及び5~10-46G南壁土層断面図（第8図）で示すように、6層に分けられる。

第I層 褐色土層：いわゆる表土層で、有機物を多量に含み粘性・しまりに乏しくパサパサする。厚さ20~30cmを測る。

第II層 黒褐色土層：細かいカーボンを含み、水分を吸うとヌルヌルする。粘性が強く、しまりが強い。厚さ10~20cm。

第III層 茶褐色土層：細かい砂粒を含むが粘性に富みしまりが強い。全体的に赤味がかった色調である。微細なカーボンを含む。厚さ10~20cm。

第IV層 暗黒褐色土層：第III層と内容物は類似するが、小さなパミスが点在する。粘性が乏しく、しまりは弱い。遺物を包含する。厚さ10~20cm。

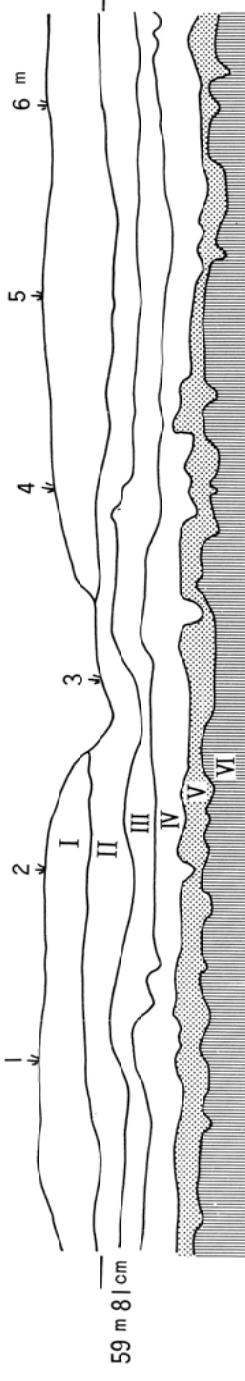
第V層 暗黄褐色土層：砂粒を割と含み、カーボンやパミスが点在する。砂質性に富みしまりが弱い。遺物を含む。厚さ10~15cm。

第VI層 黄褐色土層：粘土質でしまりが強い。この土層の上部に、部分的にではあるが砂質性に富む土質がみられる。

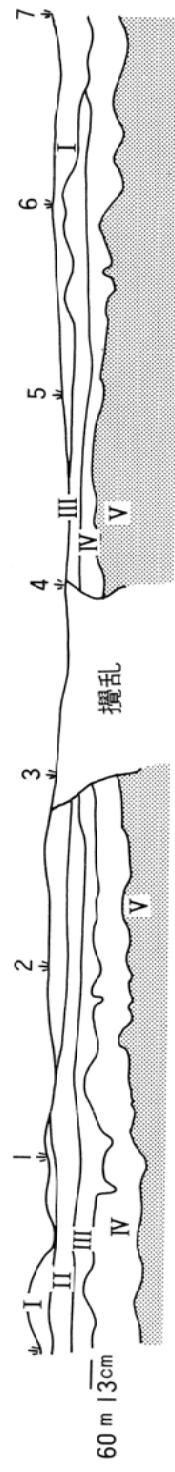
以上が基本的な層序となる。A地区の微高地全体に整地跡がみられ第II・III層が削片されいることがわかった。遺物は第III・IV・V層に含まれる。

B地区については、第8図の54-3G東壁土層断面図を参照していただきたい。第1層の茶褐色土層は、客土で耕作土用の土壤と考えられ、本来は第II層以下が自然堆積土になる。また地点により、第II層の暗褐色土の下に、第III層として真砂を主体とする層が認められる所がある。真砂層の上部には、大小様々なパミスを含む場合が多く、パミス層として認知できる層は存在しない。B地区の遺物包含層は認め難いと言へる。

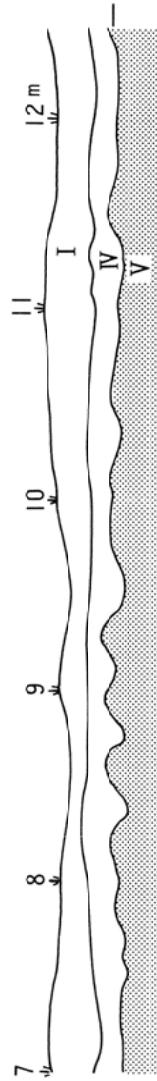
これらのことから、毒沢遺跡を初め周辺の遺跡なども、大なり小なり、最上川氾濫の影響があったものと思われる。



▲ 15-41 ~ 43 G 西壁土層断面図



▲ 5 ~ 10-46 G 南壁土層断面図



▲ 54-3 G 東壁土層断面図



第8図 土層断面図

第1層 茶褐色土
いわゆる耕作土で砂粒子、粘性・しまりに乏しい。
乾燥すると風に舞う。

第II層 茶褐色土
砂質性に富み、粘性・しまりに乏しい。

第III層 純真褐色土
砂粒を多く含み、ハミス粘が存在する。ザラザラし
しまりがない。

第IV層 茶褐色土
砂質性に富み、ザラザラし、しまりがない。本層の
上部に大小様々なハミスを含む。

2 遺構の分布（第9図）

遺構が確認されたのはA地区で、B地区は前項で述べた事柄や、抜根による攪乱・破壊も手伝って検出できなかった。

AⅠ区においては、全く遺物・遺構はみられない。遺物・遺構は主にAⅡ・Ⅲ区にみられる。検出された遺構は、土壙9基・ピット6基・長方形の竪穴遺構1基・不明の遺構1基である。

土壙はAⅡ区の微高地北東斜面にみられる。抜根のために完璧に破壊されたものも充分にありうる。明確に検出できたのは9基である。SK1～SK5の集中するあたりが最も高く、プランが確認できたのは、第Ⅳ層下部ないしは第Ⅴ層上面においてである。

ピット群もAⅡ区で検出された。配列を呈しそうな趣きをもつ。プラン確認面は第Ⅳ層中で第Ⅴ・Ⅵ層を掘り込む。覆土に特色があり共通点がみいだせる。

長方形の竪穴遺構1期は、AⅢ区で検出された。微高地から続く緩斜面に検出された。プラン確認面は第Ⅳ層上部である。第Ⅴ・Ⅵ層を深く掘り込んでいる。

その他ひょうたん形の性格不明の遺構1基を検出する。プラン確認は第Ⅳ層上面で行ない、長方形の竪穴遺構に近接して発見された。

3 遺物の出土状況（第9図）

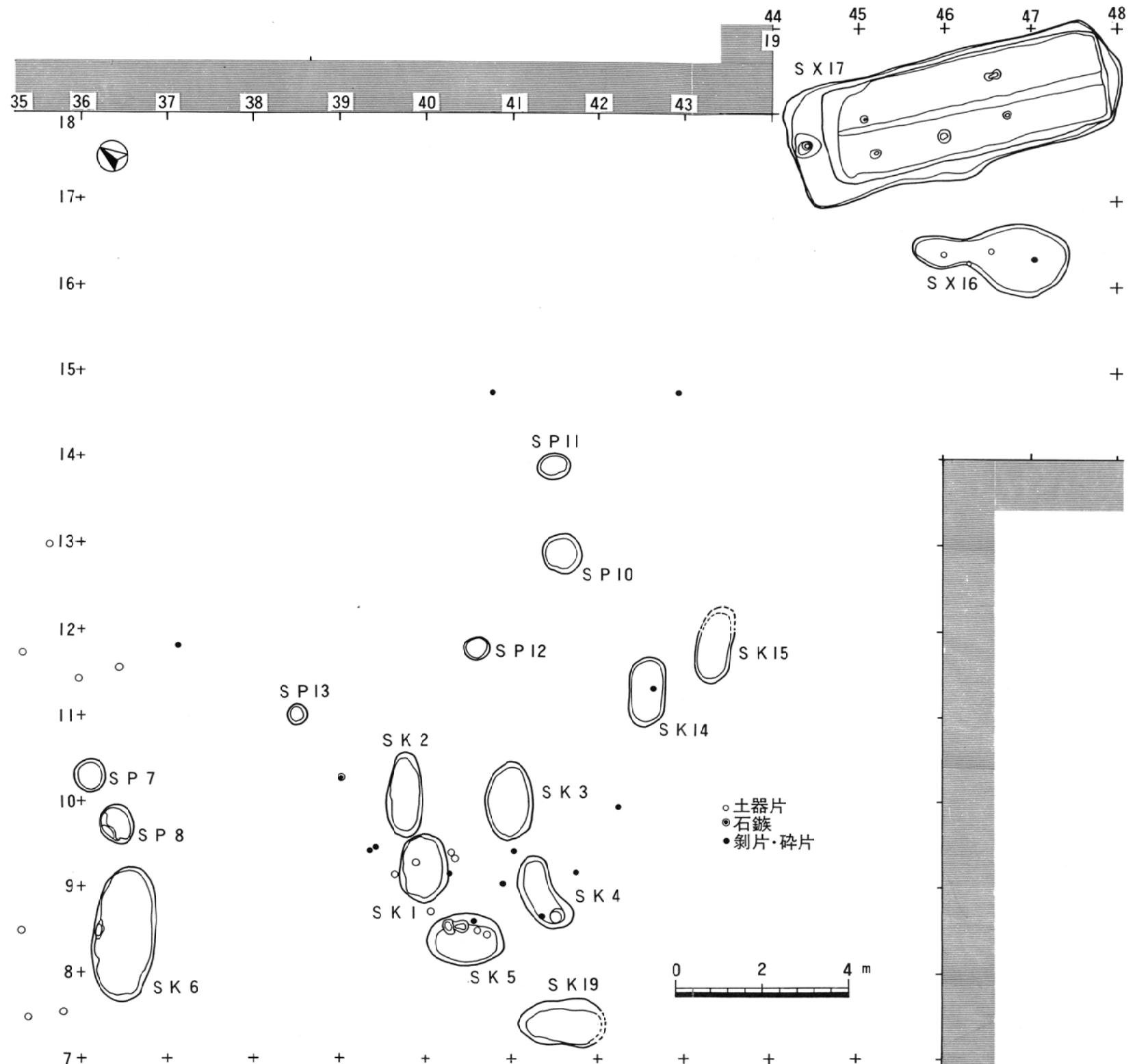
当遺跡において出土した遺物は僅かにすぎない。そのほとんどがAⅡ区に集中しており、B地区では、表面採集の資料や攪乱層等から出土したものを得たにすぎない。

A区の杉は第Ⅴ層深くまで、しっかりと根をおろしているものが多く、抜根の際遺物の在り方に大きな影響を与えたことは充分に考慮にいれなければならないが、遺物の広がりと、遺構との関係を知るためにも出土地点を記録している。

SK1～5が検出された近辺に、遺物の集中が割とみられる。土器はいわゆるすべてが織維土器で、土壙内の覆土中にも含まれていた。石器では、SK2の北側に石鏃が1点出土しており、他に剥片・碎片がみられる。土壙近辺の遺物が包含される層は、第Ⅳ層下部第Ⅴ層中にかけてである。土器は時期的には縄文時代前期のものと思われる。

SK6付近にも遺物の分布がみられる。この辺は攪乱が著しいところであるが、遺物は第Ⅳ層中に包含されており、縄文時代後・晚期の土器片が散見できる。

SX16の北面側の抜根の際、表裏縄文が採集されたが、この種の土器はSX17付近にもみられた。ある狭い範囲に埋没していたのではないかと思われる。第Ⅲ層下部から第Ⅳ層中に包含されており、磨滅が著しい。



第9図 遺構・遺物の分布図

IV 遺構と遺物

1 遺構

検出された遺構は、土壙9基、ピット6基、長方形の豎穴遺構1基、ひよたん形遺構1基である。順に説明してゆく。

〈土壙〉

1号土壙（SK1）（第10図）

A II区中央の9-39・40Gで検出された土壙である。プランは第V層上面で確認する。長径160cm、短径110cmを測り、橢円形を呈する。第VI層の上面まで掘り込みがみられる。庭面はほぼ平坦である。覆土は4層に分けられ、第1層から纖維土器が1片出土している。土器片の文様からみて、縄文前期前葉に属すると思われる。

2号土壙（SK2）（第10図）

A II区中央の9・10-39Gで検出された土壙である。1号土壙の北側に近接している。プランは第V層上面で確認する。長径 200cm、短径90cmを測り、長橢円形を呈する。第VI層まで掘り込まれ、底面は中央部に平坦な面があり、その両側に落ち込みがみられる。平坦な底面から碎片が1点出土している。

3号土壙（SK3）（第10図）

A II区中央の9・10-40・41Gで検出された土壙である。2号土壙の東側にあたる。長径 180cm、短径 110cmを測り、橢円形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、西側隅に杉の根による攪乱がみられ荒れている。覆土は3層に分けられる。遺物の出土はみられない。

4号土壙（SK4）（第10図）

A II区中央の8・9-41Gで検出された土壙である。長径 180cm、短径80cmを測り、東側が内側にはいり込み、歪んだ橢円形を呈する。土壙南端にピット状の落ち込みがみられる。底面は全体的に凹凸が目立つ。碎片が1片底面より出土する。

5号土壙（SK5）（第10図）

A II区中央の8-40Gで検出された土壙である。長径 180cm、短径 120cmを測り橢円形を呈する。底面は凹凸があり、2ヶ所にピット状の落ち込みがみられる。覆土は3層に分けられる。遺物は底面から纖維土器3片と剥片が1点出土する。

6号土壙（SK6）（第11図）

A II区北西隅近く、7~9-36Gで検出された土壙である。長径 320cm、短径 140cmを測り、検出した土壙中もっとも大きい。長橢円形を呈し、西側の立ち上がり直下に径50cm、

深さ20cmほどのピット状の落ち込みがみられる。

覆土は3層に分けられるが、ほぼ中央が抜根によって攪乱されている。遺物は出土していない。

14号土壙（S K14）（第11図）

A II区南よりの11-42Gで検出された土壙である。プランは第V層上部で確認する。長径160cm、短径90cmを測り橢円形を呈する。底面はほぼ平坦で覆土中から碎片1点が出土する。

15号土壙（S K15）（第11図）

A II区南よりの11-43Gで検出された土壙である。14号土壙の南東側にあたる。抜根によって東側が破壊されている。長径120cm以上、短径80cmを測り、橢円形を呈すると考えられる。第VI層まで掘り込まれ、底面は平坦である。

19号土壙（S K19）（第11図）

A II区西側7-41Gで検出された土壙である。抜根によって南側が破壊されている。長径170cm以上、短径100cm前後を測り、橢円形を呈する。

S X16（第12図）

A III区北東側15・16-45~47Gで検出した遺構である。第IV層上面において第III層と酷似した茶褐色土が、ひょうたん形のプランを呈して表出したものである。長軸370cm、cd径70cm、ef径170cm、くびれ部50cmを測る。底面はほぼ平坦で固くしまっている。覆土は3層に分けられ、第1層から土器片が3片出土し、第3層から碎片1点出土している。土器片の文様から判断すると縄文時代後期前葉のものと考えられる。

〈ピット〉

7号ピット（S P7）（第12図）

A II区北側10-35・36Gで検出された。第IV層中でプランを確認する。径70cm、深さ20cmを測る。覆土は固くしまっている。底面は平坦で固い。

8号ピット（S P8）（第12図）

A II区北側9-36Gで検出する。第IV層中でプランを確認する。径80~90cm、深さは20cmから40cmを測る。底面は固くしまっている。覆土は3層に分けられる。

10号ピット（S P10）（第12図）

A II区12・13-41Gで検出する。第IV層下部でプランを確認する。径90cm、深さ20cmを測る。底面は平坦で固い。覆土は4層に分けられ、全般的に固くしまった土質である。

11号ピット（S P11）（第12図）

A II 区13・14-41Gで検出する。第IV層下部でプランを確認する。径80cm、深さ20cmを測る。底面は平坦で固くしまっている。覆土は全般的に固くしまっている。

12号ピット（S P12）（第12図）

A II 区11-40Gで検出する。第IV層中でプランを確認する。径60cm、深さ20cmを測る。底面は平坦で固くしまっている。覆土は4層に分けられ固くしまっている。微細なカーボンを含む層が多い。

13号ピット（S P13）（第12図）

A II 区10・11-38Gで検出する。第IV層中でプランを確認する。径40cm、深さ20cmを測る。底面は平坦で固い。覆土は極めて固くしまっている。

〈長方形の竪穴遺構〉（S X17）（第13図）

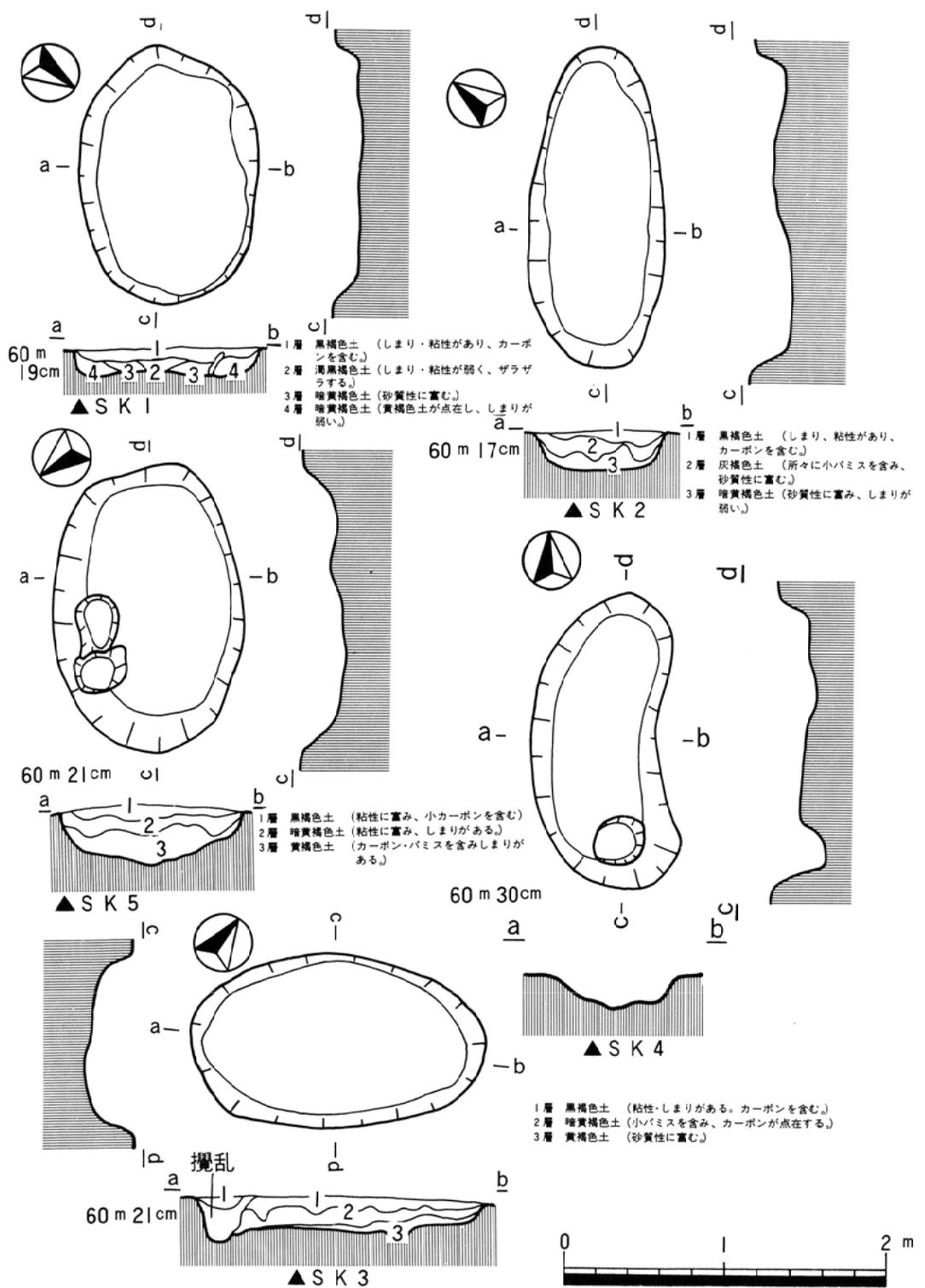
A III区の16~18-44~47Gで検出された遺構である。第IV層上面においてプランを確認する。その際遺構の南半分は第III層に酷似した層相が、北半分は濁黄褐色を主体とする層相が平面的におさえることができた。土壌群の検出された微高地から続く緩斜面に構築されており、遺構の北側から南側方向にも緩い傾斜がみられる。

長軸800cm、短軸270cmを測る二段構築の竪穴遺構である。内郭は長軸680cm、短軸210cmを測る。外郭は長方形に近い形を呈するが南辺が丸くなっている。第VI層上面に底面をもち、北側に径30cm、深さ34cmのピットを有する。ピットの立ち上がりは、底面とともに固くしまっている。

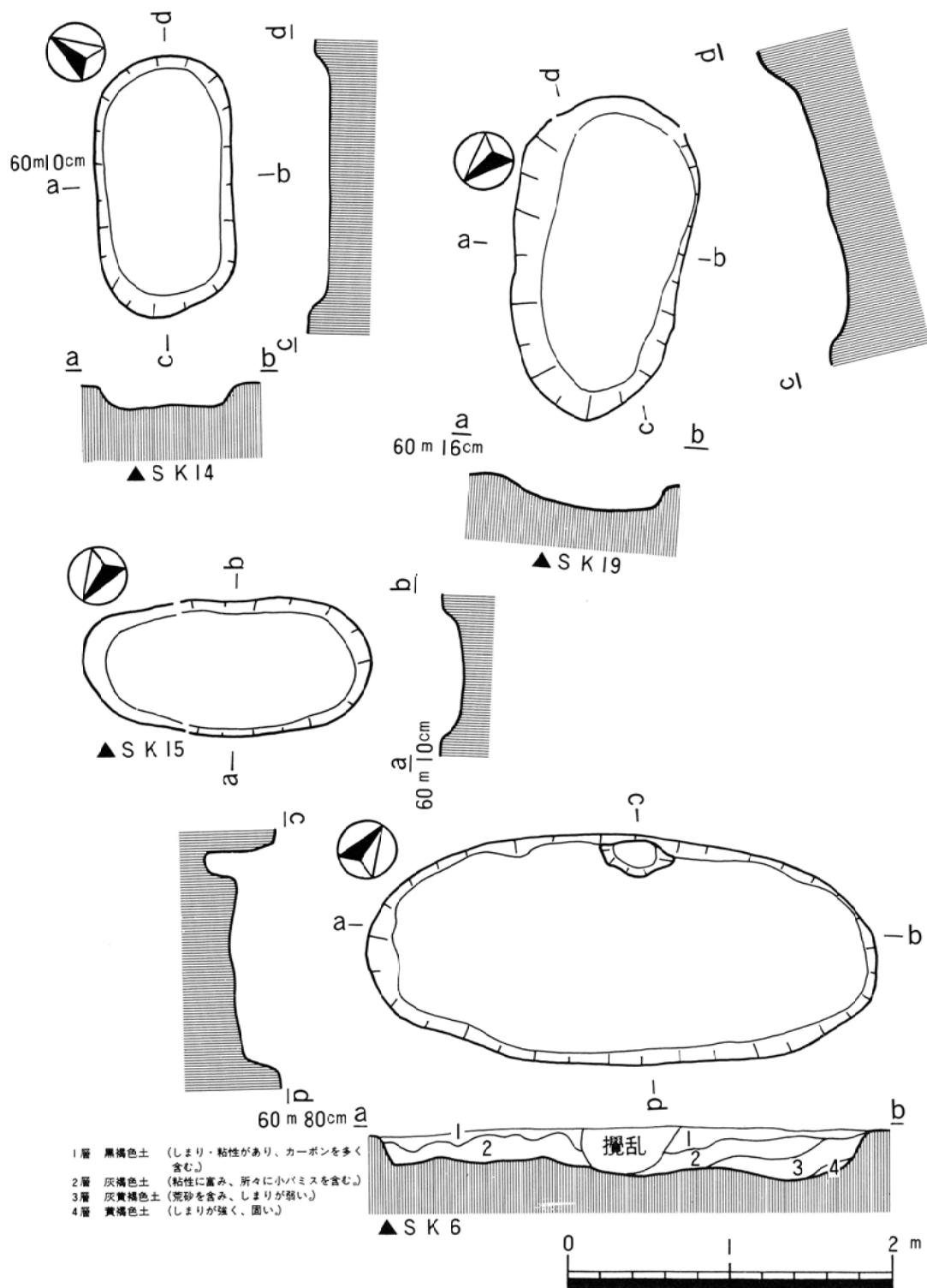
内郭は第VI層を20~40cm掘り込み構築しており、形はほぼ長方形を呈する。長軸に沿って中央に浅い溝がみられる。この溝を挟んで両側に柱穴と考えられる施設が検出された。
1：径18cm、深さ30cm 2：径20cm、深さ24cm 3：径20cm、深さ30cm 4：径30cm、深さ27cm 5：径14cm、深さ31cmを各々測る。柱穴内の覆土はいずれも、カーボンと黄褐色土が混在した土壤である。

底面は固くしまっており全面的に火熱をうけている。特に赤く焼けただれていますのは、柱穴1と2の間である。第13図下段の模式図で示すように、火熱した部分は壁にもみられる。更にこの上には厚さ1~2cmの薄く細かいカーボン層が全面に広がる。長軸に沿う溝は確かに火熱した痕跡は認められるが、他所と比べて顕著ではない。

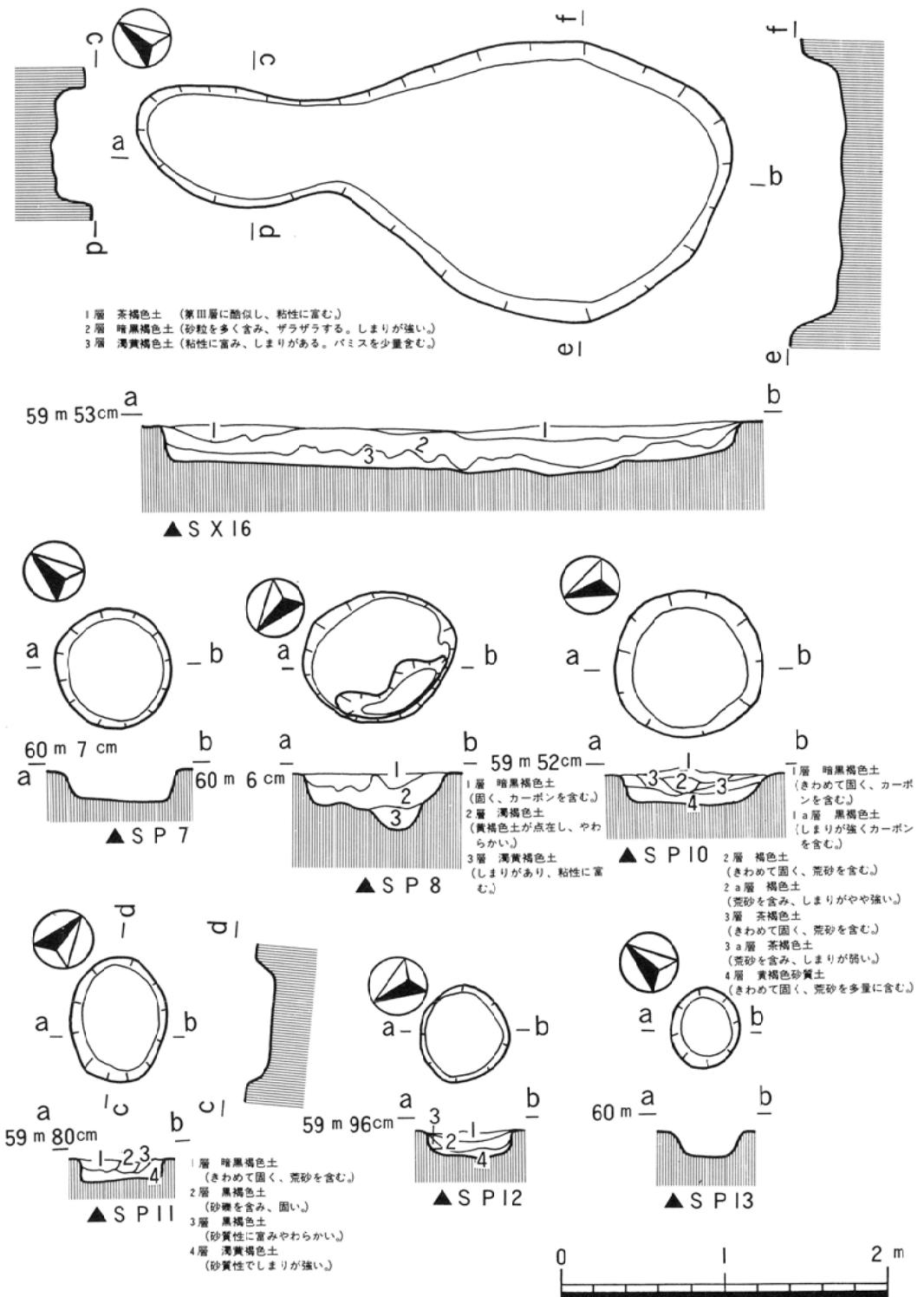
覆土は30層に分けたが、第20層から繩文式土器底部が1片出土しただけである。8枚のカーボン層を確認しているが、各々層相が異なる。覆土層全般にわたって少なからずカーボンを含んでおり、北側から順に堆積していったと考えられる。



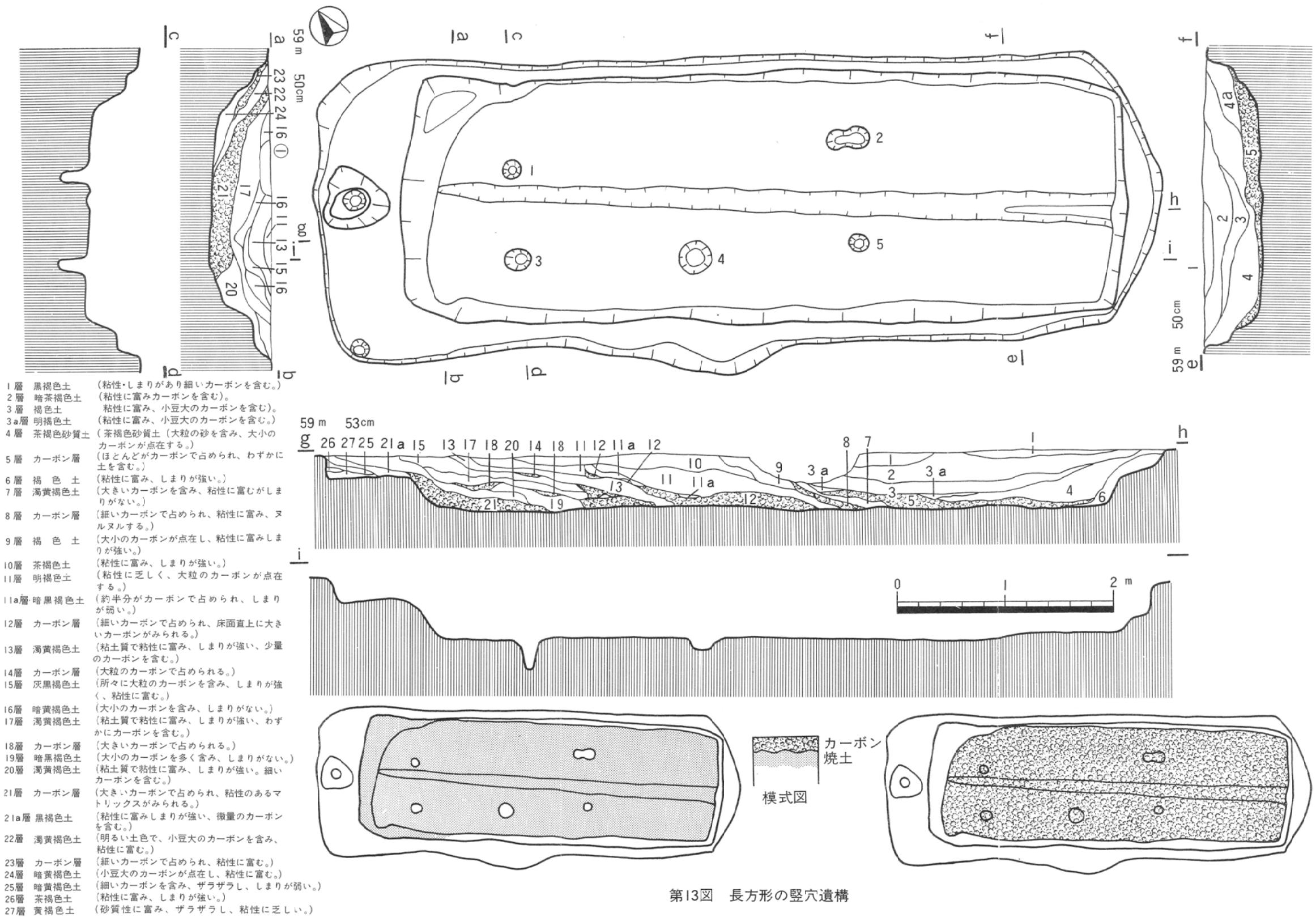
第10図 土壌(I)



第II図 土壌(2)



第12図 土壌(3)・ピット



第13図 長方形の竪穴遺構

2 出土遺物

毒沢遺跡で出土した遺物は整理箱にして約1箱分である。土器総数38片、石器総数25点で遺物総数が100点に満たなく、少量得られたにすぎない。これらの資料を順に説明していく。

〈土器〉

全部で38片出土しているが、いずれも小破片で復元できるものはない。第I群から第III群に分けて説明していく。

第I群土器（第14図1～6・8・9）

縄文時代前期の土器を一括した。全部で14片出土し胎土に多量の植物纖維を含むいわゆる纖維土器である。内外面ともに赤褐色を呈するものが多く、裏面に脱纖維痕が顕著にみられ、横走するのがほとんどである。整形・胎土と良い土器である。器壁の厚さ6mm前後を測る。磨滅が進んだ破片が多い。

1号土壤から2片（3・5）、5号土壤の覆土第2層中から5片（4・6・9）がそれぞれ出土した。施文原体はR{L}の多条を使用し施文している（3・4・8）もの、（1・1・6）のR{L}の単節斜行縄文、（2・9）のL{R}の単節斜行縄文を施文したもののがみられる。（5）はL{R}の単節を縦・横に回転させ羽状縄文を表現している。（6）も羽状を呈するがはっきりしないようである。全体的に右撚りの原体を多用している。

第II群土器（第14図7・第15図1～11）

縄文時代後期の土器を一括した。更に2類に分類して説明していく。

第1類（第14図7） 撥条文が施文された破片で1点だけ確認した。磨滅が著しく、胎土に白砂や石英砂を多く含む。整形・焼成は良い方である。色調は暗黄褐色を呈し、厚さ6mmを測る。右撚りの撚条文が施文されている。

第2類（第15図1～11） 内外面に縄文が施文された土器を一括した。全部で13片出土したが、これらはすべて同一個体に属する。その内訳は口縁部片1、胴部片10、底辺部1底部1片である。辛うじて器形を知ることができる。

胎土に白砂と石英砂を多く含み第1類の土器と酷似する。整形・焼成は良好である。色調は内面が灰褐色を呈するものが多く、外面は黄褐色を呈するものが多い。器壁の厚さは1cm前後を測る。いずれの破片も全体的に磨滅が著しい。この種の土器はS X16・17の覆土や、16-45G第III層下部から第IV層上部にかけて多く出土する。

器形は平縁口縁で幾分内湾し、胴部にやや張りをもち底部に達する平底の深鉢形土器と

考えられる。底径は推定復元すると約6.5cmと思われ、底面に木葉痕がみられる。文様は内外面とも縄文が施文されているが、内外面の底辺部にまで及ぶ。外面は底辺部3cm幅で横方向に丁寧な整形が行なわれている。

文様の施文原体は $R\left\{L\right\}^f$ の単節斜行縄文であるが、左撚り1段の撚糸の太さがそれぞれ異なるものを撚っているために、施文した時に撚糸の太さが互い違いに表出し、コントラスがついたものと考えられる。

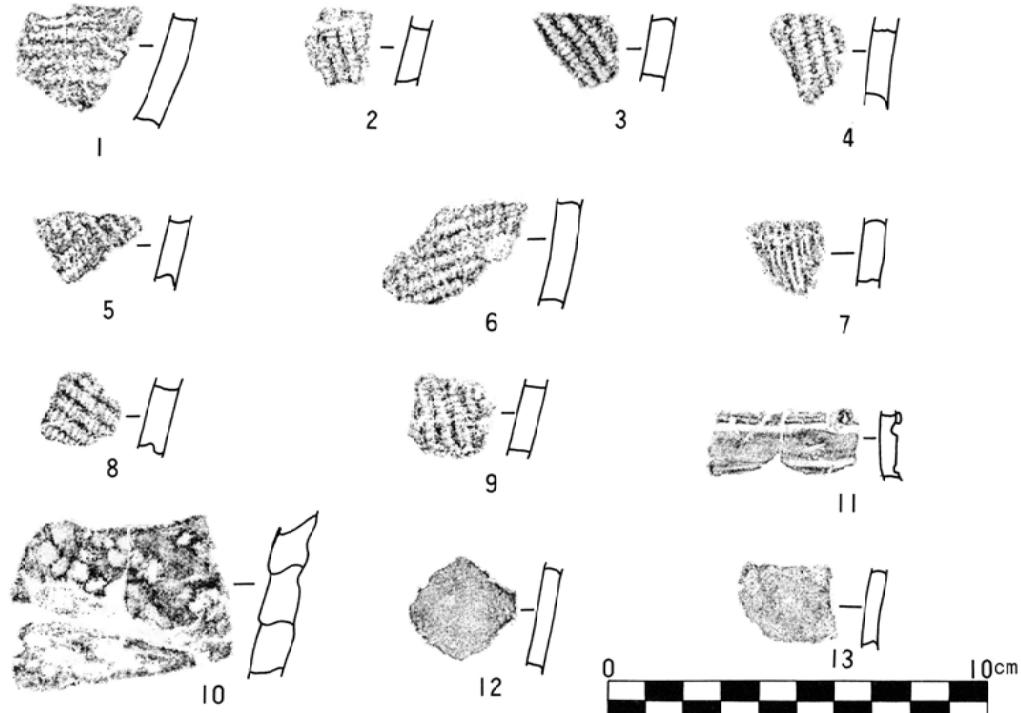
第III群土器（第14図11～13）

縄文時代晩期の土器を一括した。いずれも小破片で全部で5片出土した。A II区北側に分布し第IV層中より出土する。先述した土器群同様に磨滅が進んでいる。

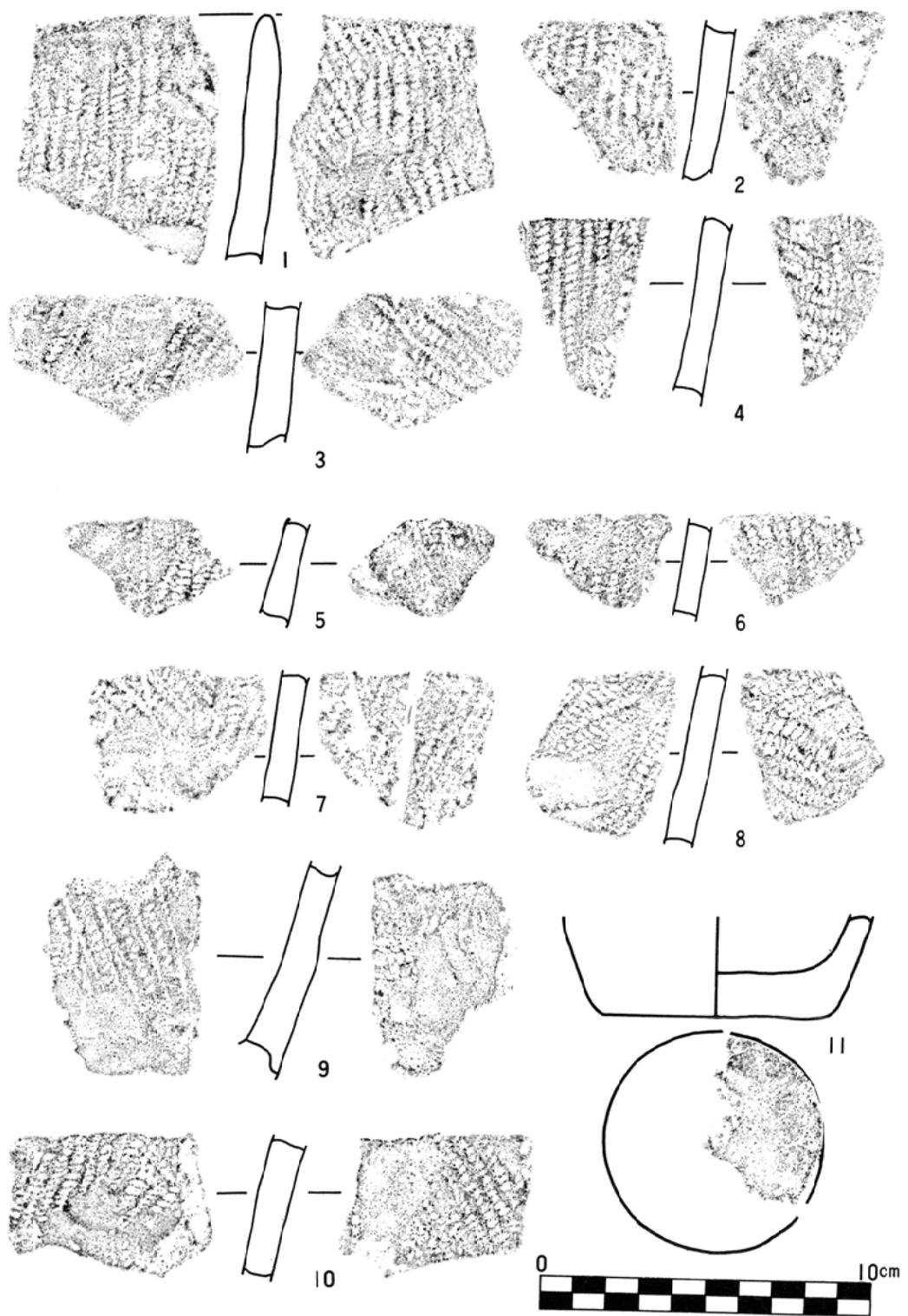
11は8-35G出土で胎土が緻密で、整形・焼成は良い。色調は内外面とも淡赤褐色を呈し、器壁厚5mmを測る。壺形土器の口縁部付近の破片と考えられる。

12は11-35G・13は11-36Gで同一個体と考えられる。胎土に石英砂を多く含むが、整形焼成は良い。器壁厚5mmを測り、色調は赤褐色を呈する。

以上簡単に述べて来たが、土器片は磨滅が進み遺存の仕方に若干の疑問が生じる。これについては後述する。



第14図 土器拓影図(1)



第15図 土器拓影図(2)

〈石器〉

毒沢遺跡で出土した石器類は石鎌2点、範状石器1点、削器1点、二次加工のある石器3点、礫器1点、凹石2点、磨石1点、剝・碎片類15点、総数26点である。以下順に説明して行く。

石鎌 (第16図1～2)

無茎(1)と有茎(2)の2種に分類できる。1はA II区10-39Gの第V層中から出土したものである。基部が平坦で二等三角形を呈した無茎の鎌である。両面に入念な加工が施され、長さ3.2cm、幅1cm、厚さ0.4cmを測る。石材は硅質頁岩である。

2はB区55-10Gの攪乱層から出土したものである。中央より下部にふくらみをもち、茎をもつ有茎の鎌である。1同様入念な加工が施されている。長さ3.7cm、最大幅1.5cm厚さ0.5cmを測る。石材は流紋岩である。1は縄文時代前期頃、2は縄文時代後期以降に多くみられる形態である。

範状石器 (第16図3・3a)

A II区17-45Gの第IV層中から出土したもので、これ1点のみである。刃部が広がる撥形を呈した範状石器である。両側に調整剝離が施され、刃部加工は最終段階で行なわれている。横断面は紡錘形を呈する。背面の一部に自然面を残している。長さ5.5cm、刃部幅4.0cm、厚さ1.8cmを測る。石材は硬質頁岩である。

3aは同石器の肉眼観察を行ない、摩滅の著しい部分を示したものである。主要剝離面側は差程顕著ではないが、背面の刃部には刃部に対して垂直な磨滅痕がはっきりと認められる。

削器 (第16図4)

石小刀などの定形石器の欠損した例とも考えられるが、一応この器種として扱った。片面加工で、細かい加工がみられる。石材は硅質頁岩である。

二次加工のある石器 (第16図5～7・9)

適当な剝片に極部的な加工を施す例が多くみられる。矢印で示した範囲に細かい加工がみられる。5は8-42G第V層中から出土する。背面に自然面を残し主要剝離面側から加工が施されている。石材は頁岩である。

6は9-39G第V層中から出土する。主要剝離面側に細かい加工が施されている。石材は硅質頁岩である。

7はSK14の覆土第1層下部から出土する。背面を加工した後に主要剝離面にも加工が施されている。石材は頁岩である。

9はSK1の覆土第2層中より出土する。打面調整の際剥ぎとられた剥片を利用したものと考えられ、主要剥離面に加工が施されている。石材は硅質頁岩である。

礫器（第16図14）

16-40G第IV層中より出土する。厚身のある円礫の一端を加工したもので、刃先が一部潰れている。長さ9.5cm、最大幅6.8cm、厚さ6.2cmを測る。

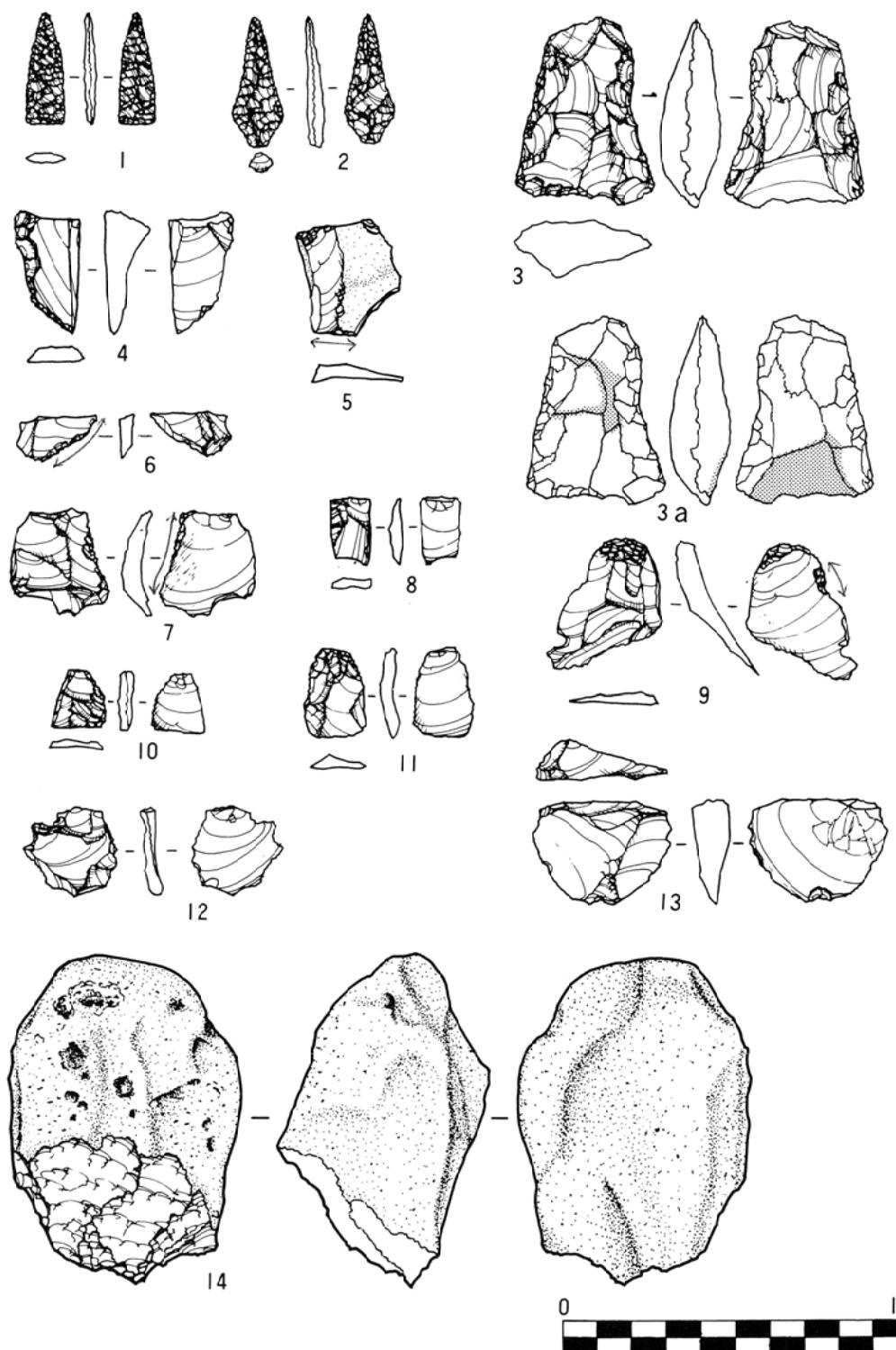
この他、打製石器では剥片・碎片が出土するが、ほとんどの石材が頁岩類で石英質のものが1点みられる。

凹石（第17図15・17）

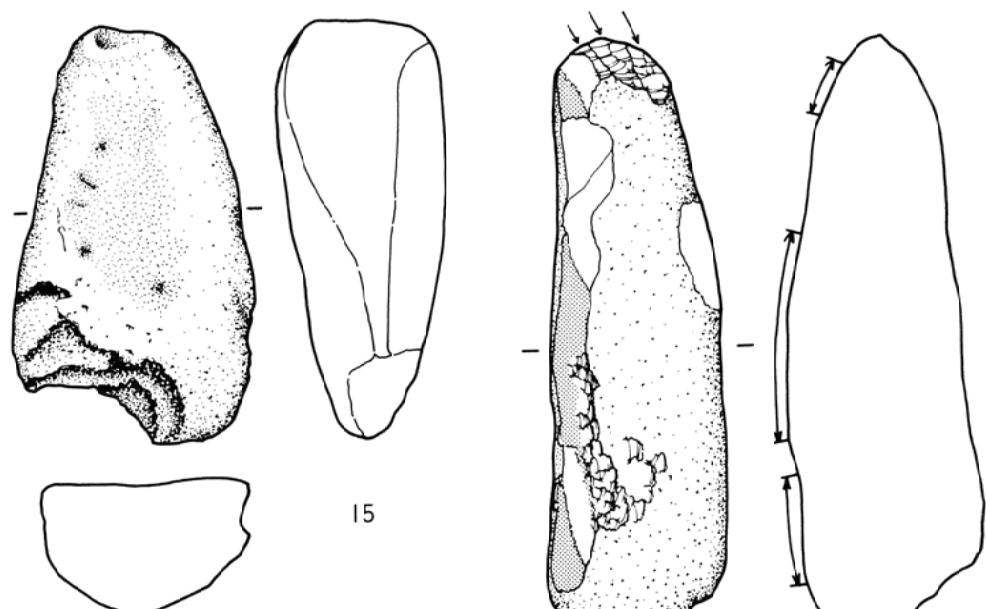
2点出土するが相方とも凹が目立たない。15はB区54-1G第II層から出土し、17は16-40G第IV層中から出土したものである。15は両平坦面に浅いくぼみを有する。一方17は片面にのみ浅いくぼみがみられる。

磨石（第17図16）

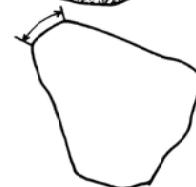
棒状の礫の一縁辺に幅1cm前後の磨滅痕を有するものである。磨滅痕はほぼ平坦であるが縦断面は緩やかな弧を描く。



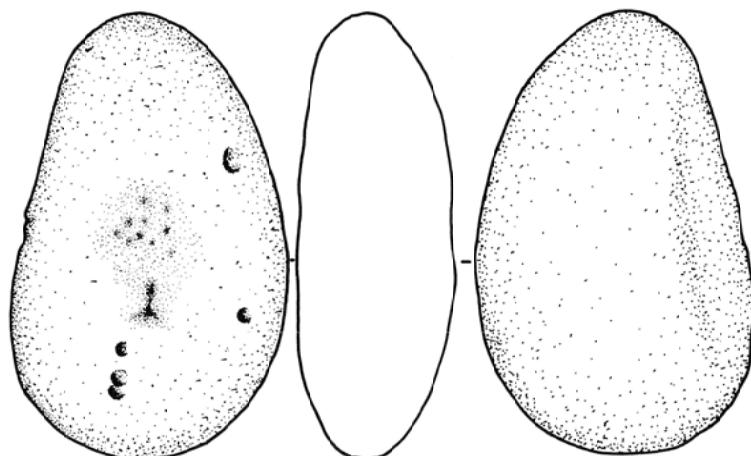
第16図 石器実測図(1)



15



16



17



第17図 石器実測図(2)

V 総括

毒沢地区の団体営圃場整備事業に伴い、破壊される恐れのある毒沢遺跡について事前の発掘調査を実施した。調査期間は昭和55年5月12日～5月21日と、昭和55年6月16日～7月17日までの2期間に調整して行なった。34日間の日程であった。

調査が進む中で遺跡の状況が次第に明らかになり、A地の畠地が盛土であること、土塁のごとく走る水路の両側、そして水路の北側全体も盛土であること、B地区が地均し及び客土であることがわかった。人為的な地形変化がみられ、遺構・遺物はほとんど発見されなかった。

遺構・遺物が発見されたのはA II・III区においてである。遺構は土壙9基、ピット6基、長方形の竪穴遺構1基、ひょうたん形遺構1基が検出された。遺物は土器と石器を合わせて約1箱分で極めて少なかった。それでも、遠い祖先の生活の営みの片鱗をみることができたようである。以下、毒沢遺跡の成果、及び問題点の大要に触れ総括としたい。

1 遺構について

A II区で検出された土壙は、楕円形を呈するものが多くの長軸200cm前後、短軸100cm前後を測るものが多く、SK 6のように大きいものもみられる。深さは35cm前後で、9基ともほぼ共通している。土壙プランの検出面は第V層上面においてである。覆土は自然堆積と考えられ、層相は酷似する。これらのことを考えあわせると、ほぼ同一時期の土壙群と考えられるが性格は不明である。

時期については、SK 5底面出土の纖維土器が知る手掛りになろう。土器片は縄文時代前期前葉頃の所産と考えられ、土壙もほぼ同時期のものと考えられる。

ピット群は、大きさにおいてまちまちであるが、その覆土においては特色のある共通点がみいだせる。覆土各層とも固く、突き固めた様子がみられる。

プランの確認面は第IV層中においてである。ピット群の分布は配列をみせるようだが、整ったものではなく、ピット間の間尺に一定の規則はみられない。時期はSP 10の覆土から陶磁器の破片が出土しており、現代のものと思われる。ピットの時期もだいたい現代のものと考えられる。

SX 16はひょうたん形を呈した遺構であるが、遺構の確認面が第IV層上面から中ばにおいてである。覆土の第1層としたものは、第III層とほとんど層相に違いがみられず、同一のものと考えた方がよさそうである。この層から縄文時代後期の土器が出土している。性

格は不明である。

長方形の堅穴遺構は第Ⅳ層上面でプランを確認した。覆土第20層から出土した縄文土器片は、摩滅が著しく流れによる搬入と思われる。時期を知る手掛りは得られなかつたが、遺構の構築面からみれば古い時代のものとは思われない。

遺構の特長をまとめると次のようになり、その性格を追求してみたい。

- ① 土壙群が検出された微高地から続く緩斜面に構築され、遺構の長軸は緩斜面に直交するが、長軸北側が高く南側に傾斜する。
- ② 内郭部と外郭部とに大きく分けられ、相方とも長方形を呈する。内郭部長軸中央に浅い溝が走り、5個の柱穴がみられる。底面全体が火熱を受けており部分的に立ち上がりにもみられる。底面直上には薄いカーボン層が堆積する。外郭部では長軸北側にピット状の遺構がみられる。
- ③ 覆土は30層に分けたが、覆土全般にわたって少なからずカーボンを含み、カーボンを主体とする層は8枚観察することができた。また、覆土に径3cmほどの木炭がしばしば目についた。

このような事柄から、炭焼がまの一一種と考えられる。炭焼がまは大きく白炭がまと黒炭がまととの二つに分けられる。二つかまとも炭がまを築くのが普通で良質の炭が製造できる。本遺跡で検出された炭がまは、しっかりした構造をもつかまではなく、容易に築ける伏焼法の一一種で抗内製炭法と称されるものと考えられる。この方法はたき口のいらない簡単なもので、地面に適当な穴を掘りその中に炭材を燃やし、頃を見計らい土をかけ蒸しやきにして炭をつくるやり方である（注1）。これでも割と良質の炭がつくれる。

このような方法は、自元の農家や尾花沢市周辺でつかわれた時期があったという。

さてここで問題となるのは、便宜的に外郭部・内郭部と称した二段構築の点や、柱穴群及び浅い溝などが、どのような意味をもっているのだろうか。各構造の意味とともに、遺構の再検査をも合わせて今後の課題としたい。

2 遺物について

第I群土器は胎土に纖維を含むことや、斜行縄文・羽状縄文が施文されていることから、縄文時代前期前葉の土器群と考えられる。

第II群土器は表と裏に縄文が施文された縄文・縄文土器である。縄文・縄文土器群と言へば東海地方の枕ノ湖II式、東北地方の縄文時代早期末葉にみられる上川名I式・梨木畠式（東北南半）、赤御堂式（東北北半）等が知られている。これらは各々土器群としてとらえられる。県内に早期末葉の縄文・縄文土器群の類例をさがせば、尾花沢市森岡北遺跡・村山市三カノ瀬遺跡・遊佐町金俣B遺跡等があげられる。

最近、縄文時代後期前半の資料の中にも、縄文・縄文土器の存在する例が知られるようになった。その好例として尾花沢市横内遺跡出土の土器群がある。内外面に縄文が施文され底辺部にまで及ぶ土器も散見できる。これらは厚手でいわゆる粗製土器の範疇にはいるものと思われる(注2)。

毒沢遺跡出土の土器は、単純な深鉢形を呈し底部に木葉痕がみられる点や、胎土に荒い大粒の砂を含む点など、横内遺跡出土の土器に類似している。本遺跡からはこのような縄文・縄文土器以外、型式を具体的に示す資料が出土しておらず、明確な所属時期は打ち出せない。横内遺跡の縄文時代後期前半の時期に比定できる可能性があることを示すに留め、今後の資料増加を期待したい。

注1) 岸本定吉・杉浦銀治共著 「日曜炭やき師入門」 総合科学出版 1980

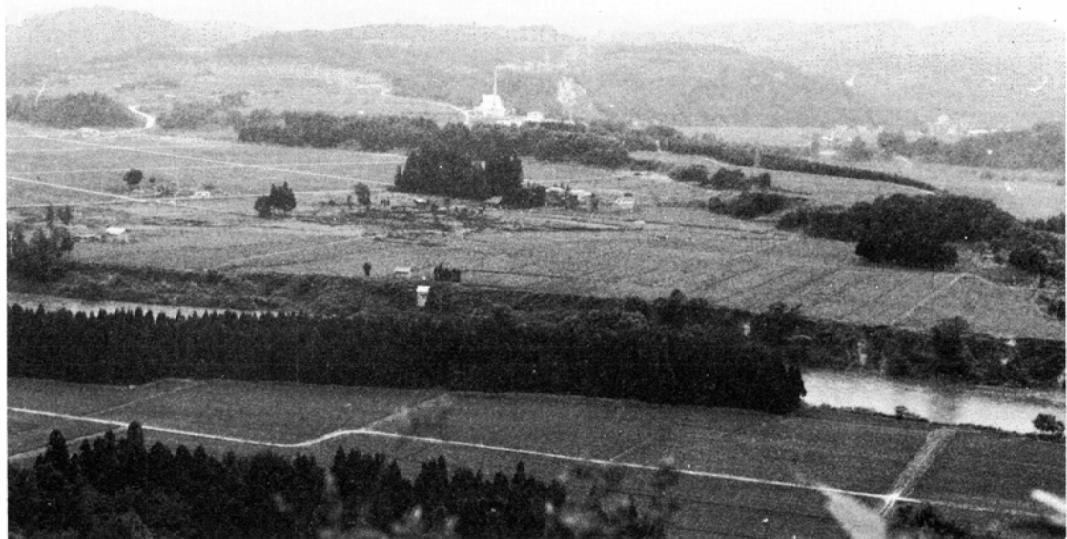
注2) 県立博物館の保角里志氏の御好意により、横内遺跡の資料を実見させていただいた。

参考文献

『八幡山遺跡』 東京都世田谷区教育委員会 八幡山遺跡調査団 1979

『多摩ニュータウン遺跡調査概報』 一昭和54年度一 多摩ニュータウン遺跡調査会 1979

『水上遺跡発掘調査報告書』 山形県教育委員会 1980



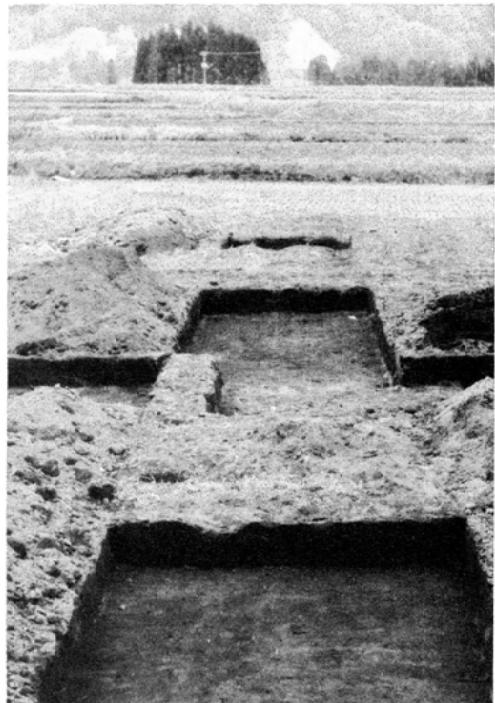
毒沢遺跡遠景



毒沢遺跡近景



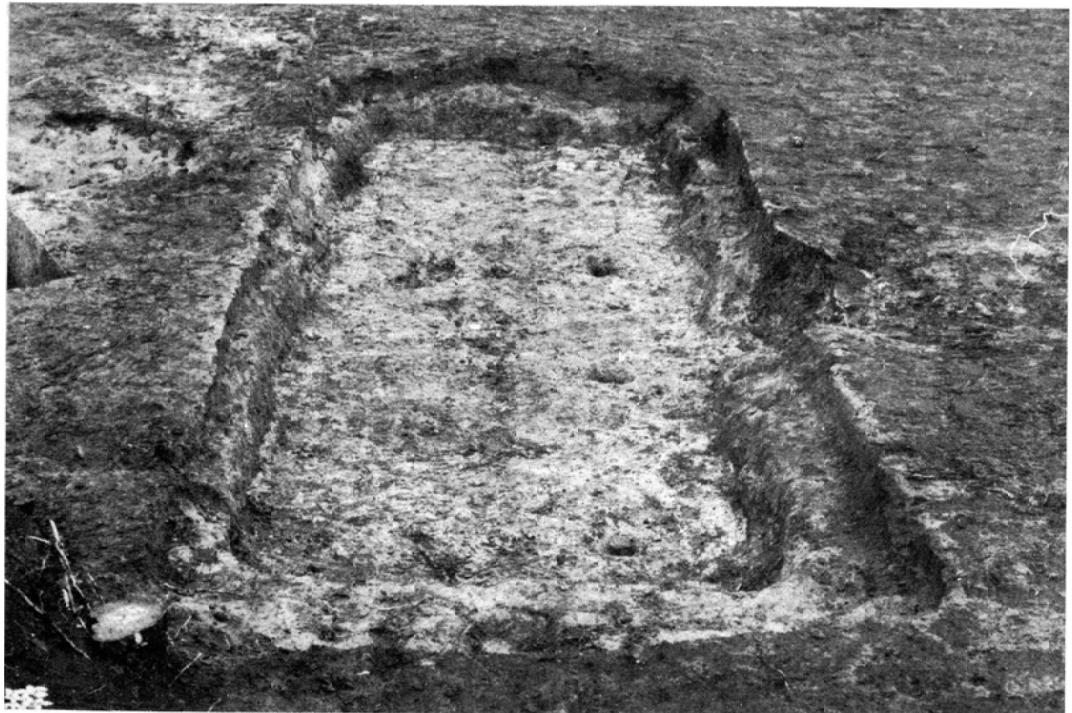
B 地区完掘状況



B 地区完掘状況



B 地区調査風景



S X 17完掘状況



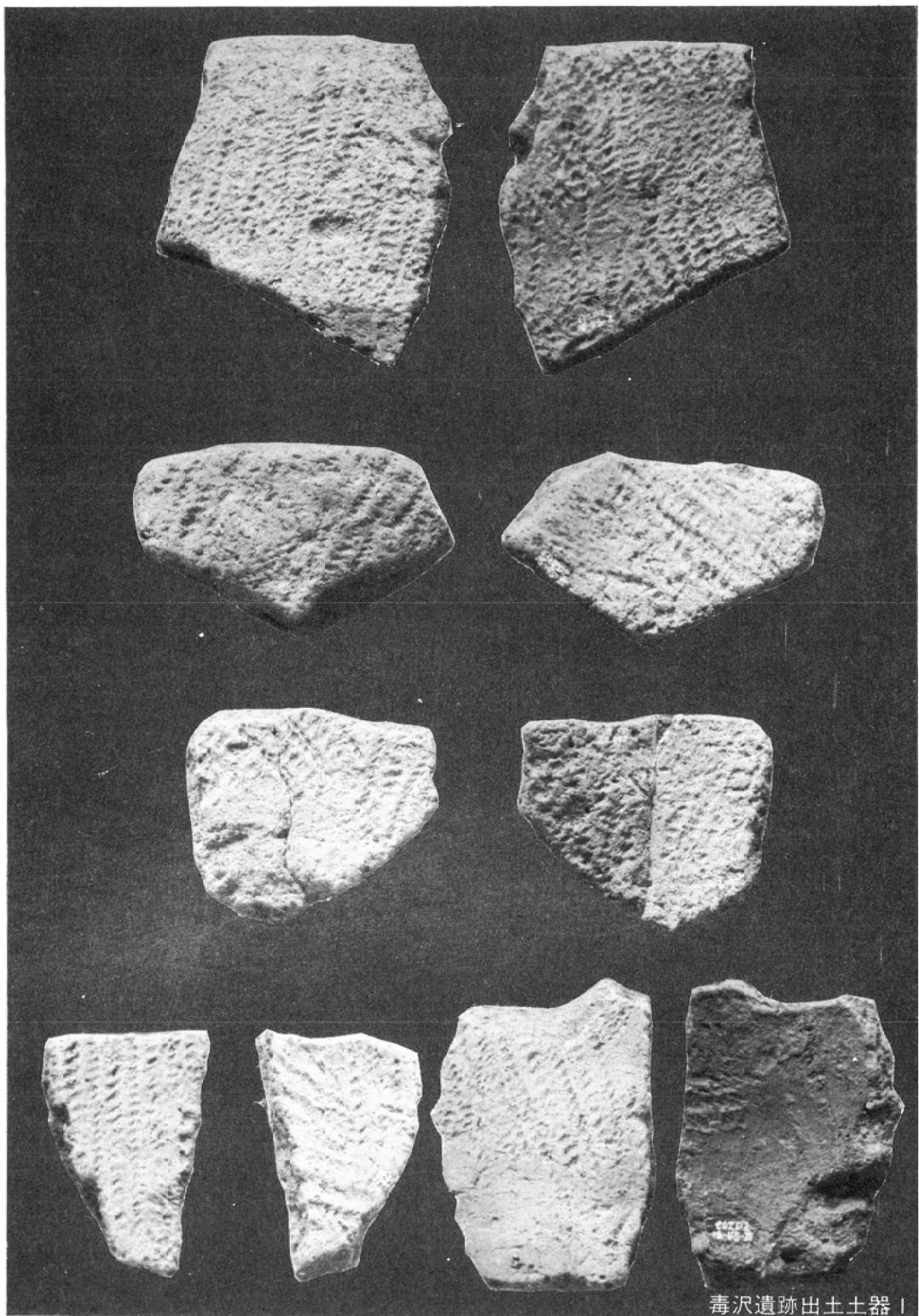
S X 17柱穴の配列状況



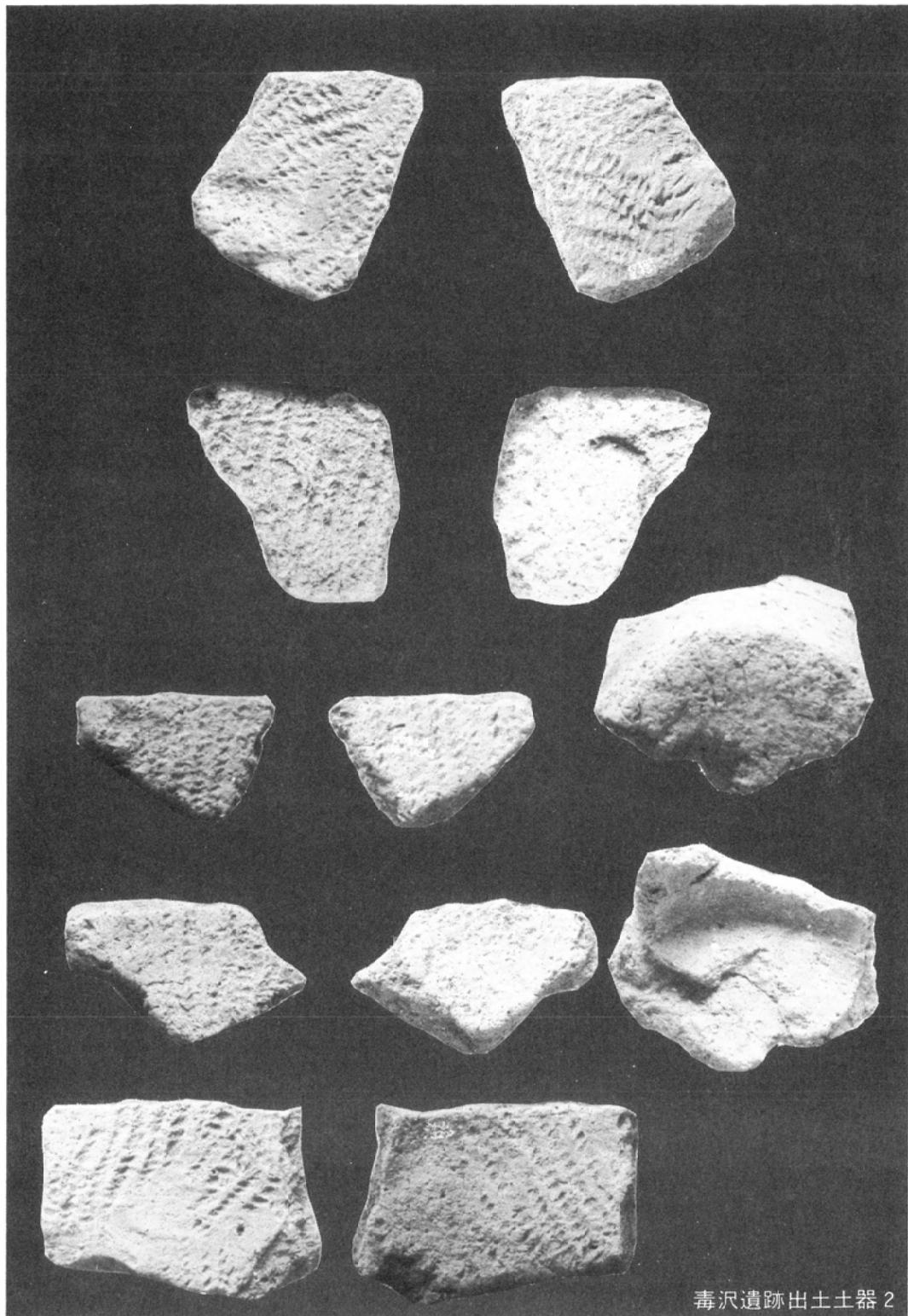
SK 1～5 の完掘状況



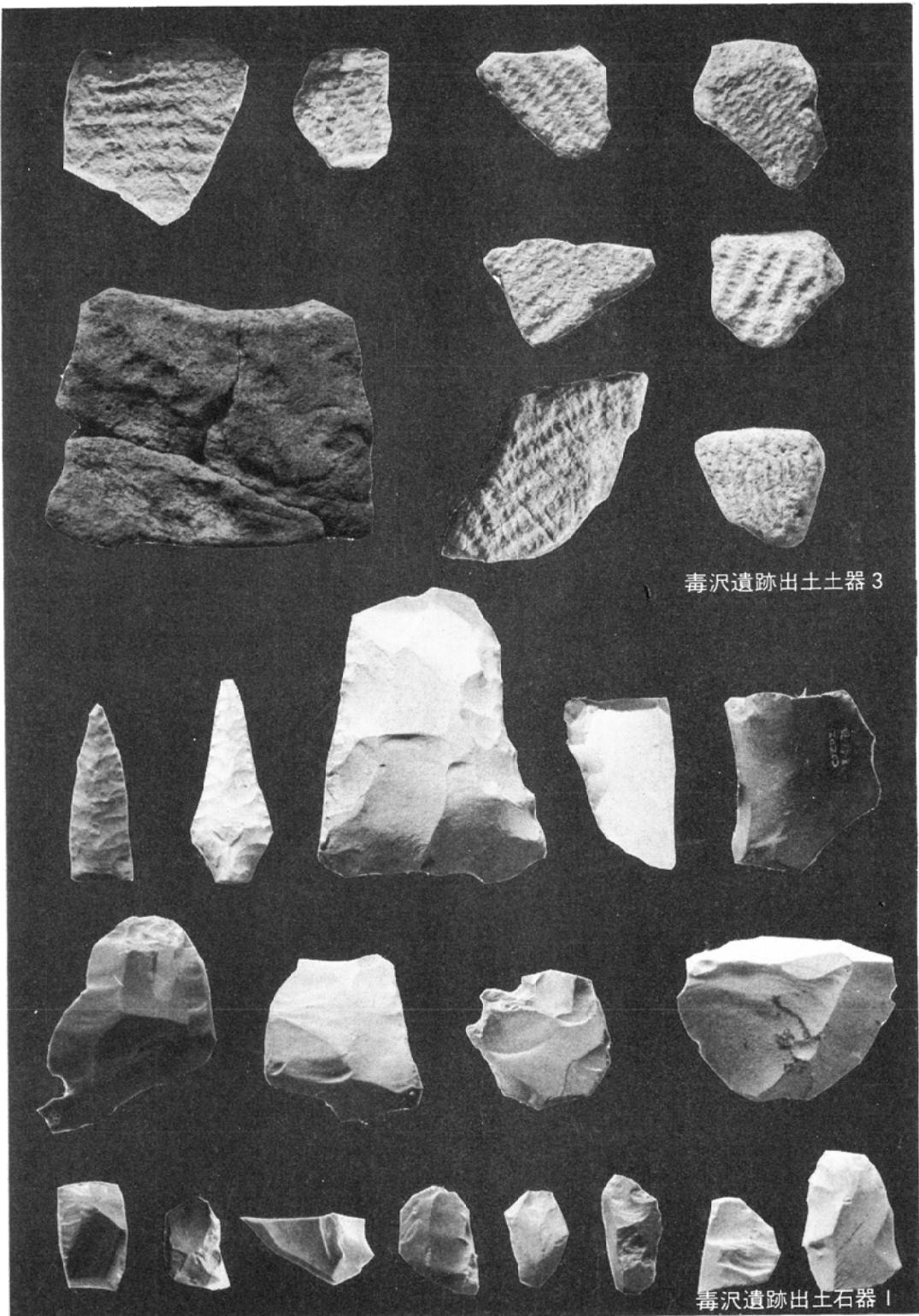
SK 4 完掘状況

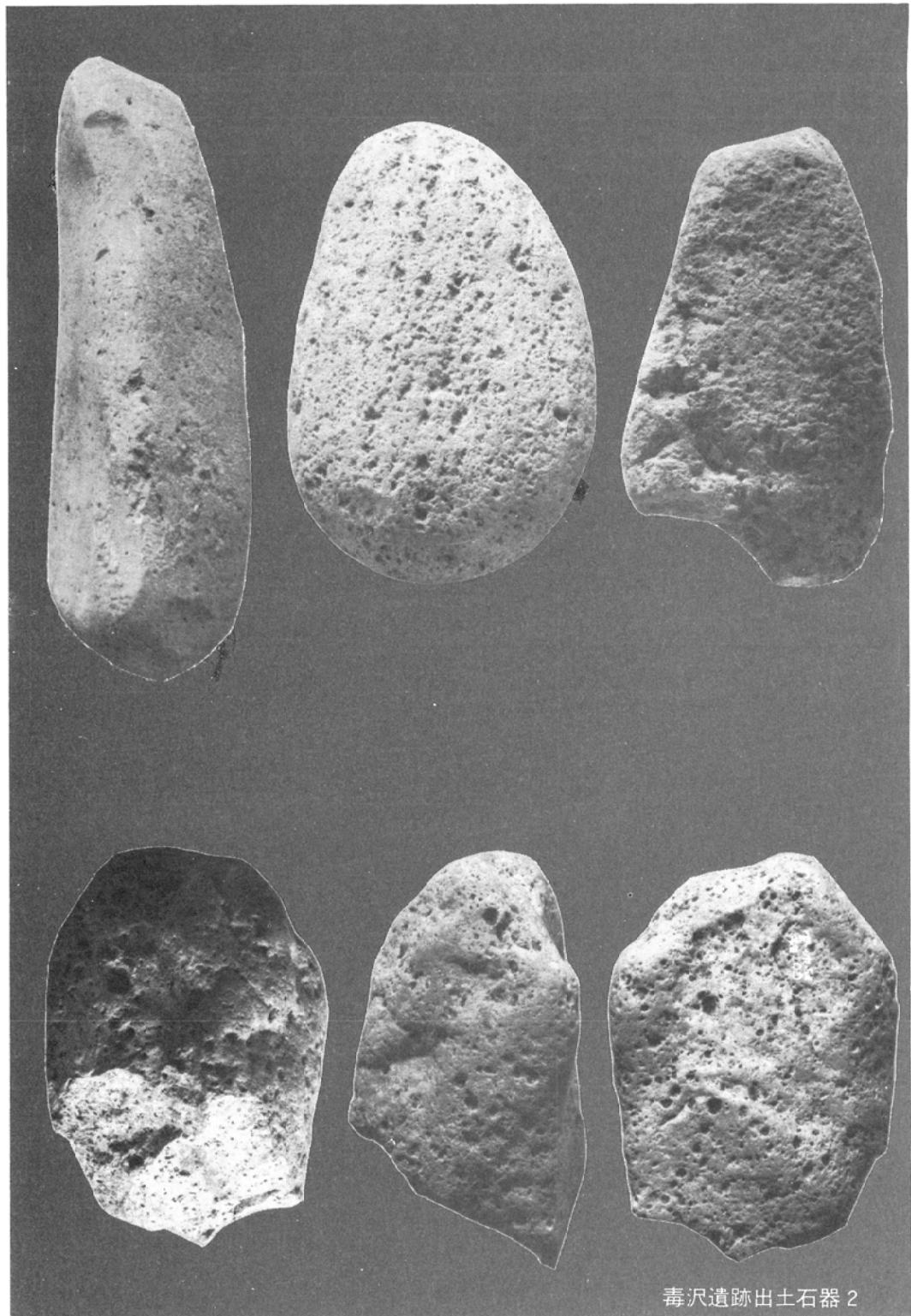


毒沢遺跡出土土器 I



毒沢遺跡出土土器 2





毒沢遺跡出土石器 2

山形県尾花沢市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

毒沢遺跡
発掘調査報告書

昭和56年3月20日発行

編集・発行 尾花沢市教育委員会

印刷 大場印刷株式会社
山形市十文字大原485-10
(印刷団地内)
TEL 86-6155